

板額御前物語

はん

がく

ご

ぜん

もの

がたり



城氏の家紋として伝わる「獅子に牡丹」

目次

◆ 第一部

板額幼少期

5

◆ 第二部

「源平の戦い」始まる

著 板額会 渡辺 悟

25

◆ 第三部

鳥坂山の戦い

53

◆ 資料編

板額御前の伝説

著 板額会 神田 真由美

125

板額御前美術館

著 板額会 伊藤 純

130

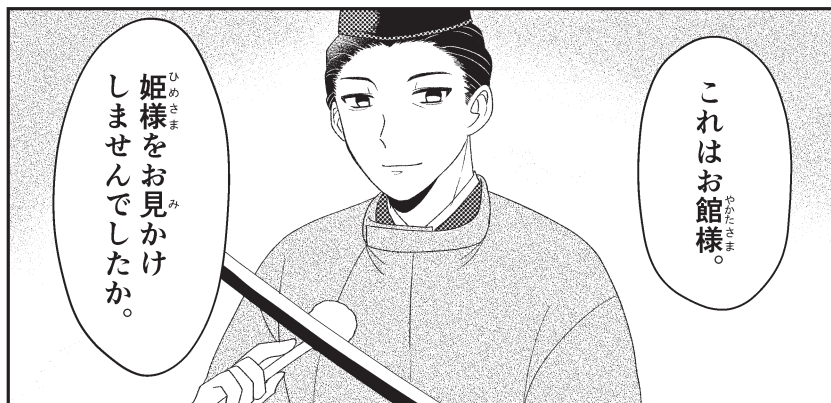
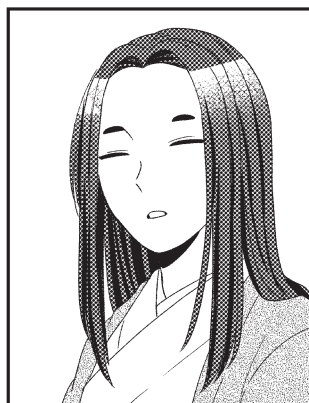
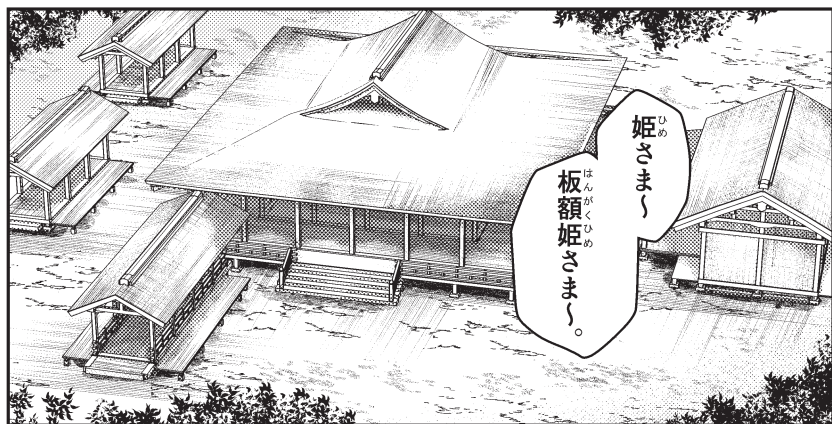
◆ 板額問答集

著 水澤 幸一

135

—
第一
部
—

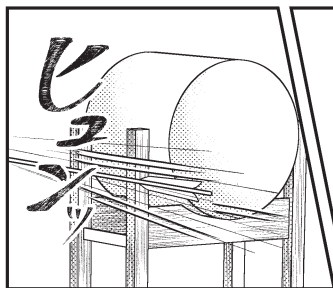
板^{はん}
額^{がく}
幼^{よう}
少^{しょう}
期^き



「武芸の鍛錬」
とやらをするのだ
そうだ。

大木を抱えるように
ゆったりと構え、

矢を地面と平行にしたら、
的をよく見ろ。



わあ！
とんだ、とんだ!!

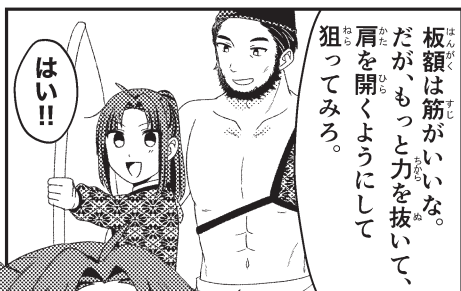


やあ!!



まあ!

まあ、まあ、姫様!!
何をなさって
おいでですか?!



板額は筋がいいな。
だが、もつと力を抜いて、
肩を開くようにして
狙ってみろ。

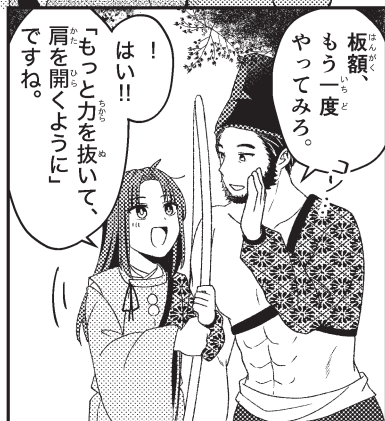
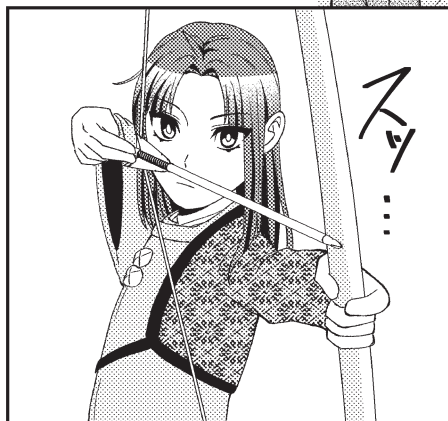
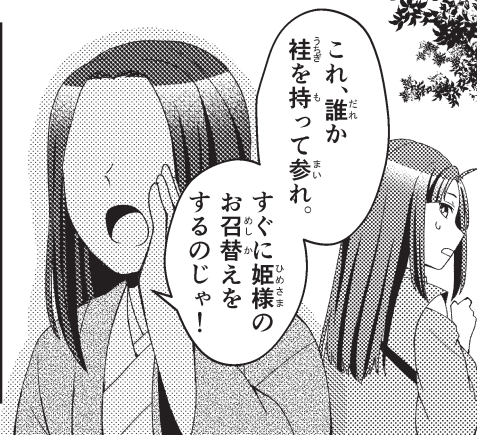
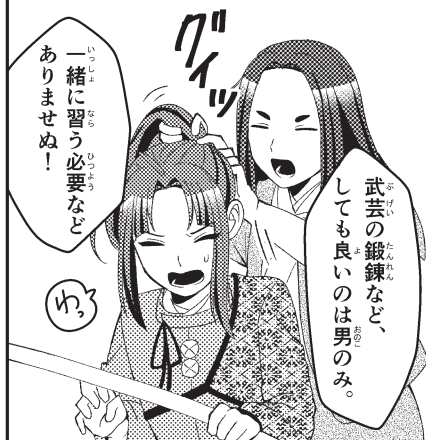
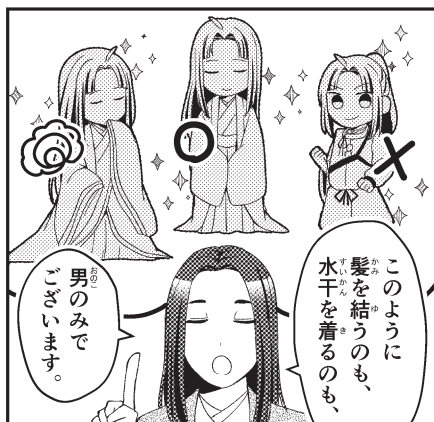
はい!!

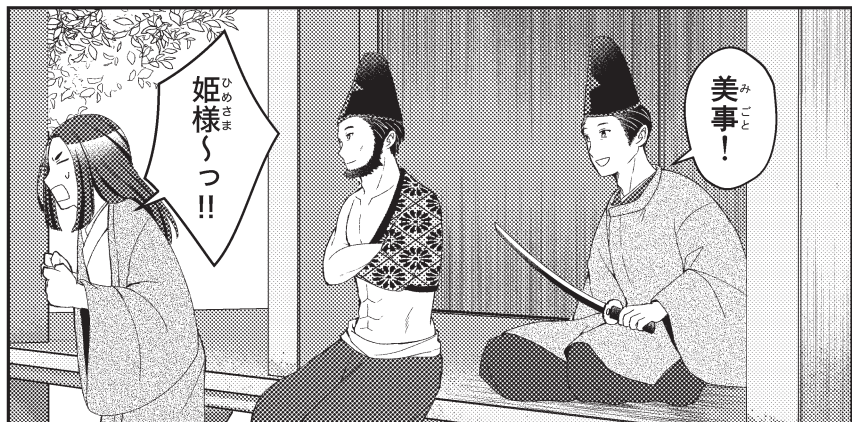
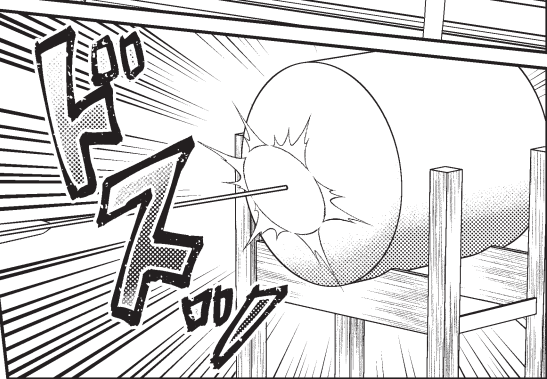
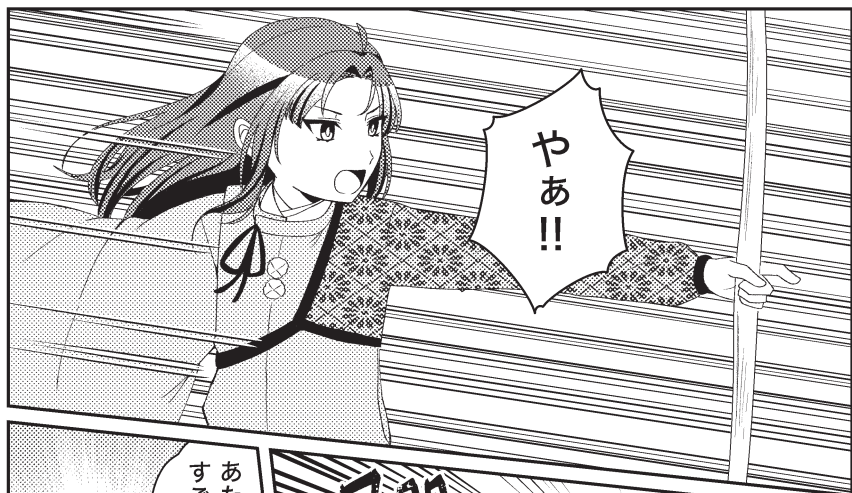


わたくし すけもりさま
私は資盛様の
「お世話係」ですから。

すけもりさま
資盛様に立派な武者に
なっていたりしたために、

わたくし ゆみなら
私も弓を習って、
撃ち方をお教え
するのじゃ。





時は平安、今から
八百年以上も前、

平清盛をはじめとした平家が
政権を握り、栄耀栄華に
酔い痴れていた時代のこと。

「板額 城家の姫」

ミスト

新潟県胎内市周辺は当時、
越後国奥山荘と呼ばれ、

「城長茂 板額の兄」

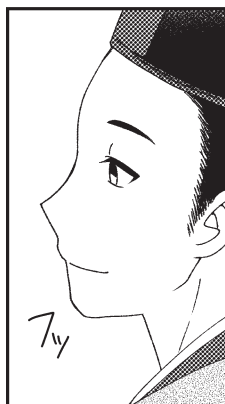
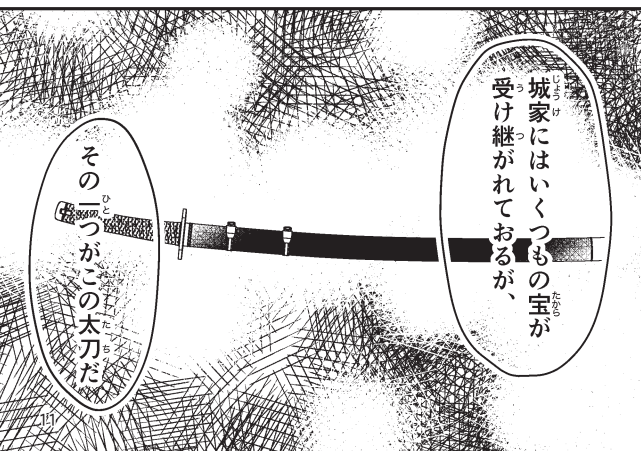
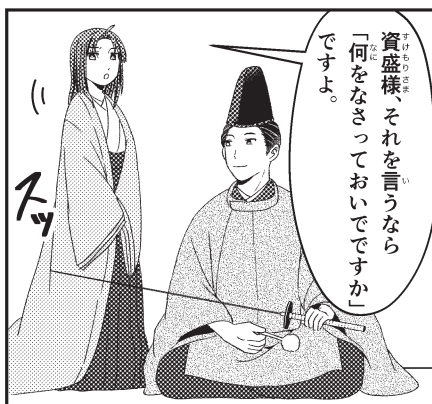
「城資盛
資永の息子 板額の甥」

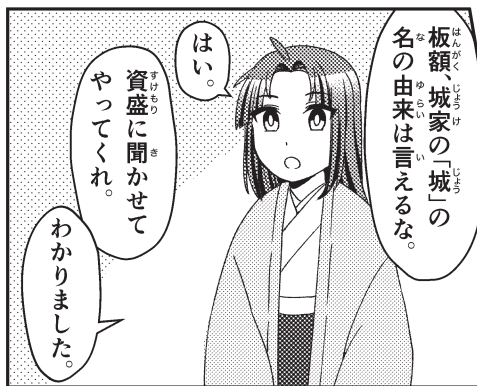
越後平氏「城一族」によって
治められていました。

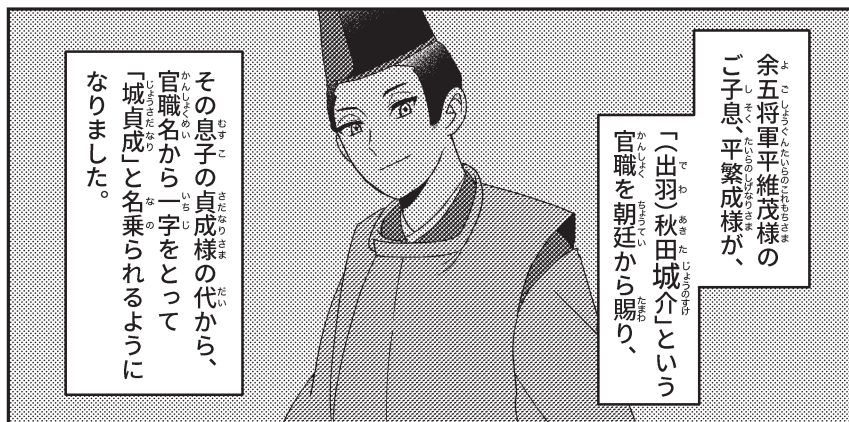
「城資永
板額の兄」

その城家が最も
隆盛を誇ったのが、

本作の主人公「板額」の兄
「資永」が治めた時代でした。









かん む てん のう
桓武天皇

かづらわら しん のう
葛原親王

たいらの たか み
平高見

たいらの たか もち
平高望

くに か
国香

しげ もり
繁盛

これ もち
維茂

しげ なり
繁成

さだ なり じょう
貞成【城】

なが もと
永基

み今の ぜん じ
**宮禪師
(乙宝寺)**

すけ なが つま
資永の妻

すけ くに
資国

すけ くに つま
資国の妻

すけ なが
資永

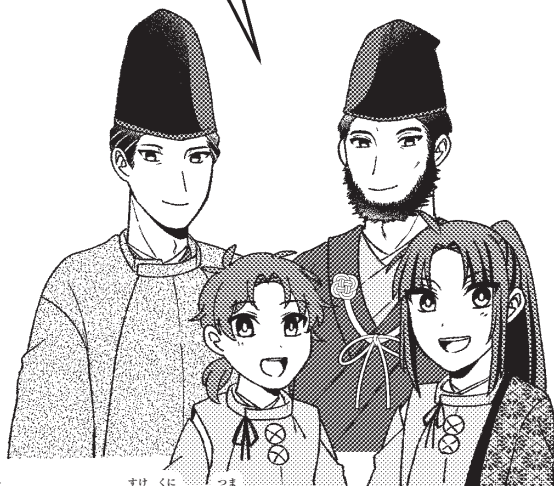
なが もち
長茂

はん がく
板額

すけ もり
資盛

へい け
平家略系図
かん む へい し
桓武平氏

じょうけ
城家に伝わる
やこ
野狐の太刀はこのように
う
受け継がれたのじゃ。





何!?
生まれたばかりの繁成が
一人でどこかへ行くはずも
なかるう!!

探せ!!!



維茂様、
一大事にございます!!!

繁成様がどこにも
おりませぬ!!!



神隠しにでもあって
しまったのか…



繁成…



維茂様、
村の外れに至るまで
廻ってまいりましたが、
どこにもおりませぬ。

赤子を連れた者など
誰も見ておらぬと
申しております。

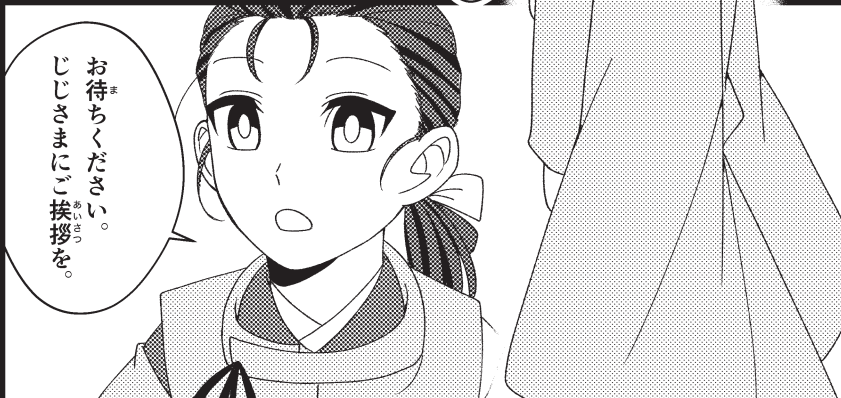
繁成が行方不明になり
皆が悲しみにくれたまま
四年経ったある日、

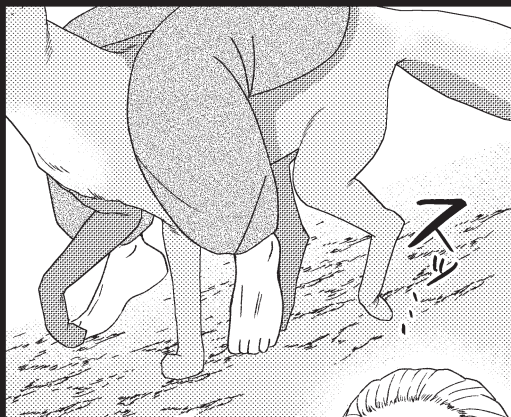
「いなくなった子は
『狐塚』にいる」

という夢のお告げが
ありました。

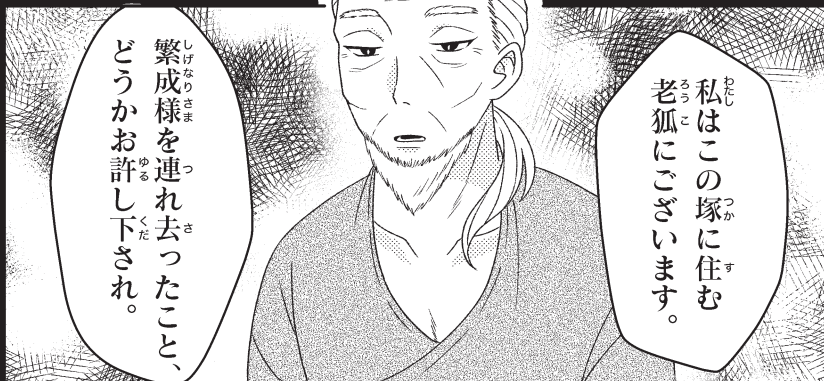
一族総出で必死に探しても
見つからなかった子供が、
本当に生きているのかと
疑いつつも、

この地域にある、
古くから霊狐が住むと
噂される塚を尋ねました。





爺様？
じいさま



私はこの塚に住む
老狐にございます。
わし
ろうこ

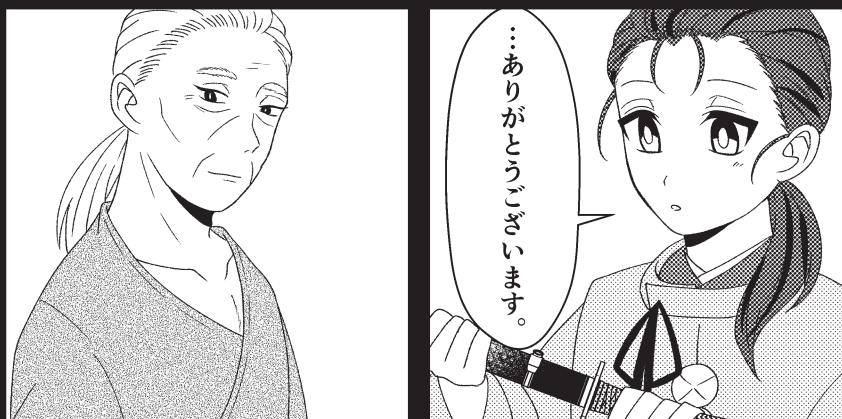
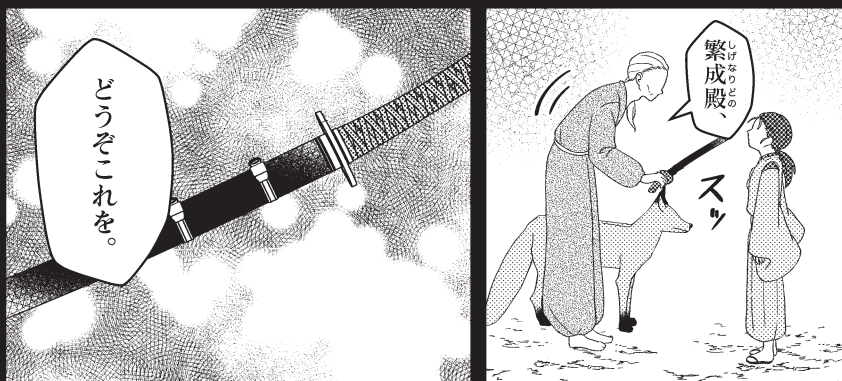
繁成様を連れ去ったこと、
どうかお許し下され。
しげなりさま
ゆめ
くだ

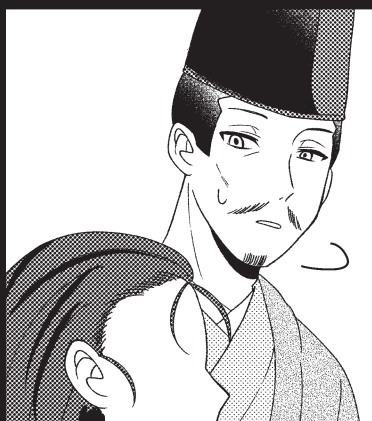
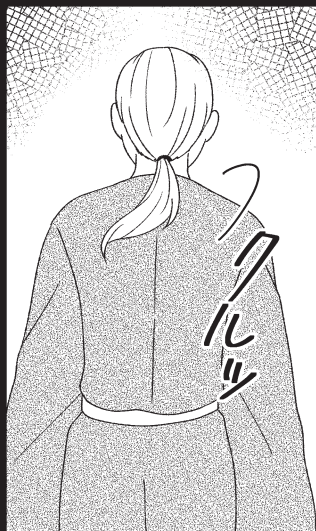


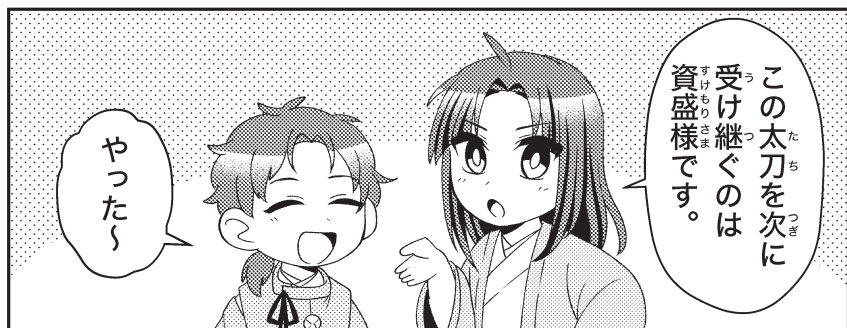
この子が生まれた折、一目見て、
私が育てれば、日本を統一するような
人物になると確信しました。
このこ
おひとめ
めみ
わし
そだ
にほん
とういつ
じんぶつ

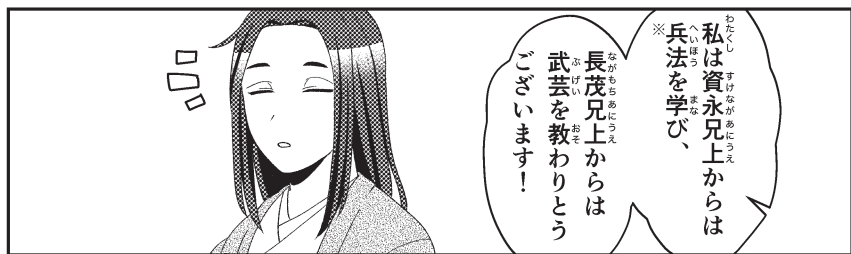
英雄を育てることは
私の使命と赤子を
連れ去りましたが、
えいゆう
そだ
わし
しめい
あかこ
つれさり

子は互いに愛する者と
過ごすのが最良なのかもしれませぬ。
こ
たが
あい
もの
す
さいよう
さい
しる



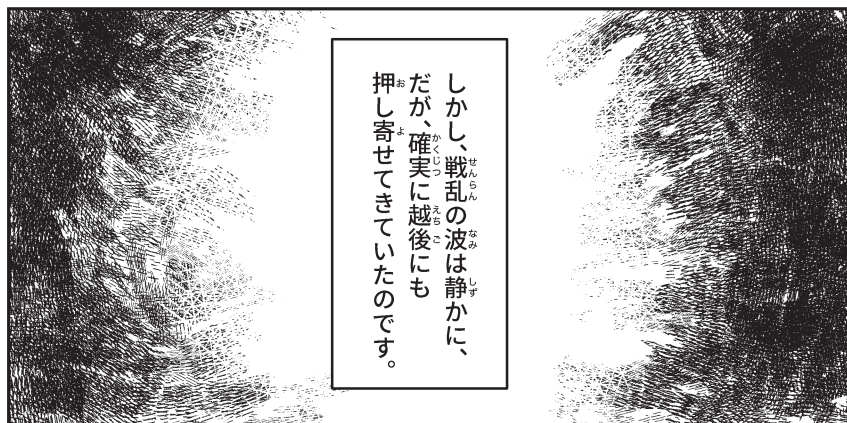
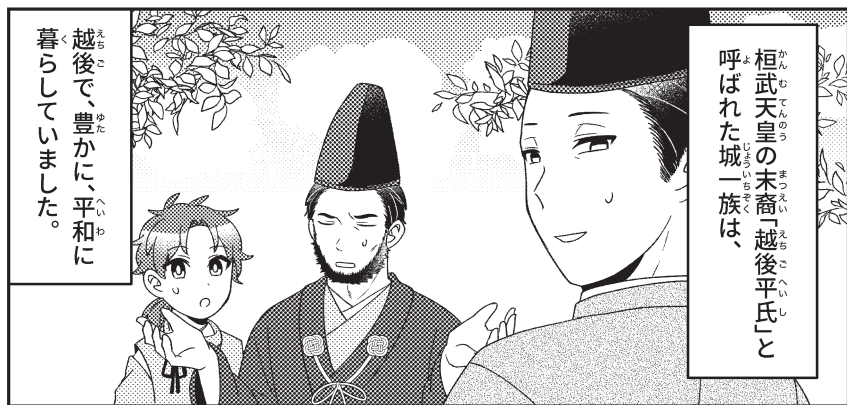
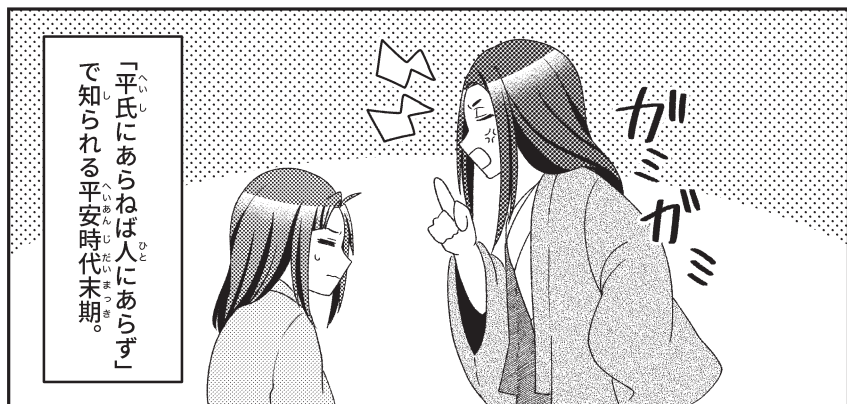






※兵法^{へいほう}=戦^{いくさ}のやり方、戦術^{せんじゆつ}





ここからは、さまざまな歴史書に残る、
板額の兄の生涯を通じて
当時の歴史の流れを解説していきます。

板額がいかにして戦乱に巻き込まれていったのかが
理解していただけたと思います。

「名前」について

本作の主人公 ^{はんがくごぜん}「板額御前」、実は、本名がわかっていません。
歴史書には「坂額御前と呼ばれている」とだけ記されています。
「ハンガク」というのは、板額の出生地「飯角（いいずみ）」が
「飯（ハン）角（ガク）」と誤読され、
さらに「ハン（坂・板）ガク（額）」と
当て字されたのではないかと考えられています。
本書では、後世一般化した「板額（ハンガク）」という
呼び方で統一しています。

この時代の人物の名前は、資料によって字が違っていたり、
環境や年齢によって変わりました。

（主な登場人物の異名）

資永：城太郎、助長、資長、助永
長茂：城四郎、助茂、助職、資職、永茂、永用
白川御館（しらかわみたち）
資盛：小太郎

本書では「板額、資永、長茂、資盛」の呼び方で統一しています。

また、この時代には、相手の本名を呼んではいけないと
考えられており、役職名などで他者を呼ぶ習慣がありましたが、
理解度を高めるため、本名等で呼び合っています。

第2部

げんぺい 「源平の戦い」始まる

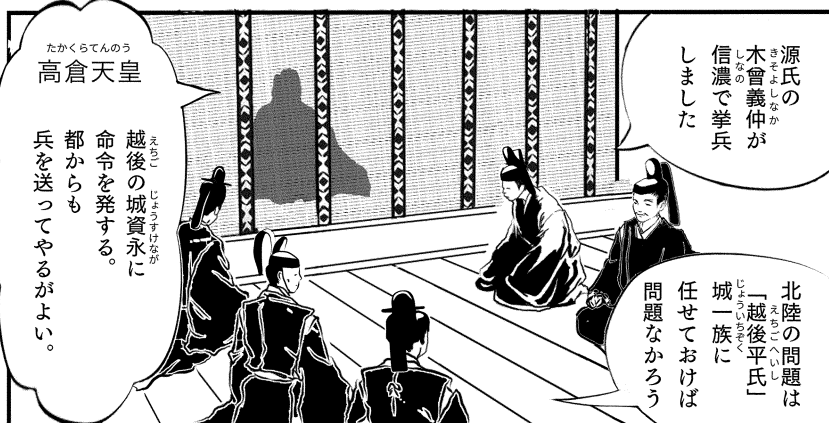


かんむり へいし
板額は桓武天皇につながる平氏に生まれ、何不自由なく幼少時代を過ごしていました。

ぜいたくさんまい
当時、平氏は日本の大部分を意のままに動かし、贅沢三昧暮らしに酔いしれていました。

しかし、都で「平氏一門にあざれば人にあらず」（平氏に繋がる人間だけが偉い、それ以外は人間以下だ）と言い放ったと噂されるほど、その横暴さが激しさを増すと、平家を倒そうと考える者が現れ始めました。それが源氏勢力です。

こうして、源氏と平氏の争い「源平の戦い」が始まりました。



源氏げんじの木曾義仲きそよしなかを倒せと

天皇からの命令が

くたりました。

「応援の軍も送る」

という知らせに對し、

板額はんがくの兄

「城資永」は…

じょう すけなが
城資永

この度の源氏勢たひ げんじぜいとの
戦いくさに、お上の助けは
必要ひつようございませぬ。

城家じょうけが集めた軍のみで
戦いくさわせていただきとう
存じます。

高倉天皇

なんと
頼たのもしい
言葉ことばじゃ。

すけなが へいけ ぜつだい きたい
資永は平家の絶大な期待の元、
越後えちご、会津あいづ、出羽でわから
一万の兵を集めました



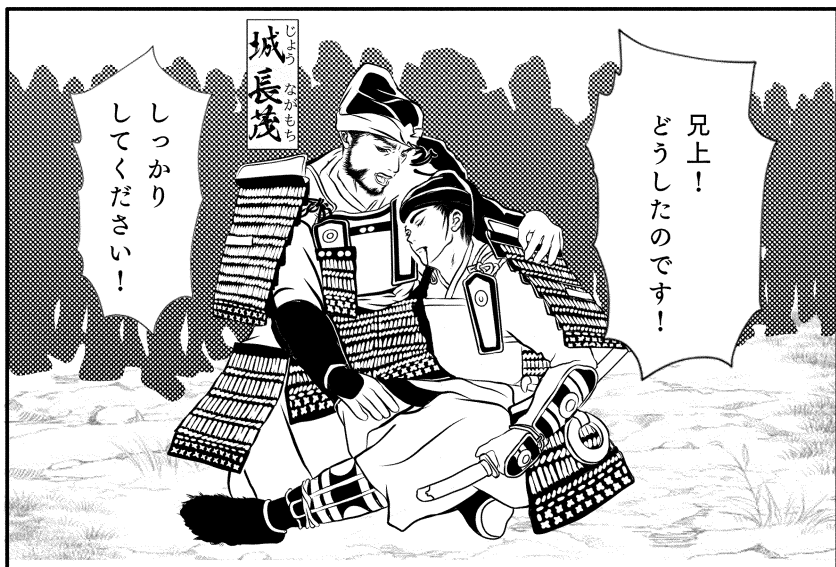
すけなが
しかし、出陣直後、
資永は…



いざ、
出陣！
しゅつじん



世を乱そうという
源氏は必ず倒さねばならぬ
この「野狐の太刀」を通じて
ご先祖様方に
日々の鍛錬たんれんの成果を見せよ。



出陣直後に倒れた資永は
介抱の甲斐もなく、亡くなってしまいました。

平家の棟梁「平清盛」の急死、
大飢饉、城資永の急死が
立て続けにおこったのは
寺院や大仏を焼き滅ぼした
平家への天罰だと噂されました。

この資永の死が
その後の源氏による反乱の対処に
大きな影響をあたえました。

資永の詳しい死因について
歴史書は伝えていません。

元々資永に持病があり、
たまたま出陣の日に発症したのかも
しれませんし、城氏の襲来を恐れた敵が
資永に毒を盛った説なども
ありますが、真実は不明です。



また歴史書ではなく軍記物語である「平家物語」ではこのように語られています。

「平家物語 六巻 しわがれ声」

越後の城資永は、木曾義仲追討のため、信濃へ向かうこととなった。

準備を整え、いざ出陣という時、急に空が暗くなり、おびただしい雷が鳴り、大雨が降った。

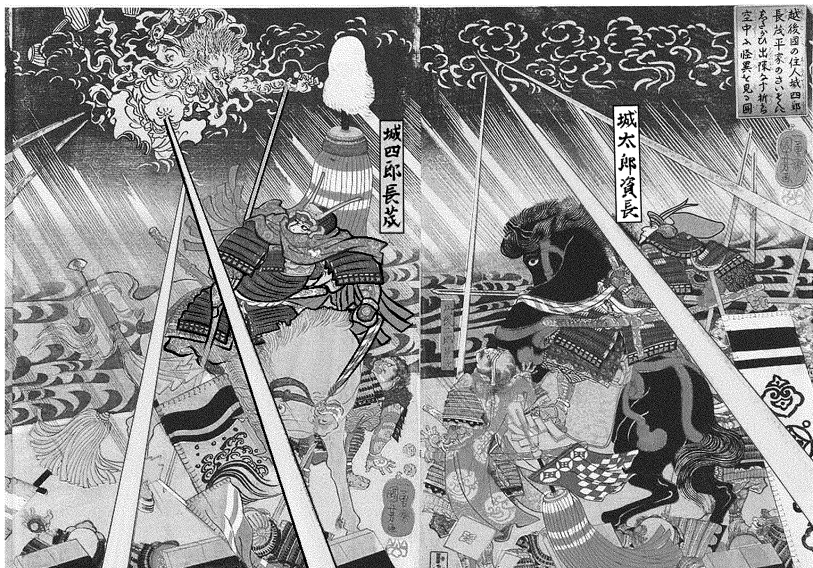
その後、空から、しわがれ声で「東大寺の大仏殿を焼き滅ぼした平家に味方するものに罰を与えよう」と、3回叫んで通り過ぎた。

皆、身の毛がよだち、家臣たちからは、「ああ恐ろしい。天からこんな御告げがあったのだから、出発を中止しましょう」などと声が上がったが、資永は「武士ともあろうものが、こんなものを恐れるわけにはいかない」と、軍勢を出した。

しかし、さらに20町（約2.2キロメートル）ほど進んだ所で、再び一群の黒雲がやってきて、城資永の上に覆いかぶさると、資永は意識を失い、落馬した。

城資永は運ばれ、屋敷に帰ったが、三時間ほどで亡くなった。

このことが都へ伝わると、平家の人々は大いに恐れ、大騒ぎになった。



「越後国の住人城四郎長茂平家のさいそくに志たがひ出陣する折から空中に怪異を見る図」

城資永による
木曾義仲追討の断念から

一年ほどのち、
奥山荘に、

再び源氏討伐の
命令書が届きました。

板額

城長茂

これは、
資永から

城家の家督を継いだ、

長茂に

宛てられたものでした。



武門の誉高き

我が城家の誇り、
獅子に牡丹の家紋を記した
赤の幟を堂々と掲げよ。



天下を手中に収めるといふ
この「野狐の太刀」に誓って
反乱軍を倒してみせよう。

長茂は、戦の作法にのっとり
堂々と名乗りを上げました。

我こそは越後の住人
城長茂

腕に覚えのあるものから
かかってくるが良い！

この時代、奇襲などは
恥であると考えられていた
ためです。

鍛練に鍛練を重ね強兵を
揃えた自負と、兄の遺志を
果たそうという思いから、
長茂は勢いに任せて
敵地中心目指して攻め進みました。



城軍は、源氏軍の
関や城などを
次々と攻め落とし、
ほとんどの源氏の軍は
あつという間に降伏しました。



勝ちに乗じた城軍は、
さらに点在する拠点を
一気に攻め続けたといいます。

しかし、
資永死去の混乱から
城氏が体勢を立て直す間に、
源氏軍は迎撃の準備を
充分に整えていたのでした。



いちゆうさいくによし
一勇斎国芳画 / 「義仲旗上合戦図」より

戦前に
作らせておいた
大量の赤い幟旗は
用意できたか。

赤い幟旗（のぼり）といえ
ば
敵である
平氏の印。

このようなもの
どうなされる
おつもりですか。

源氏軍 木曾義仲
総大将

いっぽう、城氏軍は

長茂様、
隊列が
長く伸び切っており
危険です。
後続を待ちましよう

いくらか落ちぶれた
とはいえ
源氏は名門の武士。

盗賊でもなかるうに、
名乗り合いもせず戦を始めるような
恥知らずはおるまい。

それに、
戦で最も大切なのは
勢いだ！
資永兄上が
見守っておられる
我が軍に
怖いものはあるまい！



長茂様、
赤い幟の一軍が
接近しております

赤であれば
味方の軍であろう。

信濃にも
我らに味方するものが
いたのだな





赤い幟^{のぼり}は捨てろ！
疲れ切った敵を
せんめつ
殲滅するのだ！

けわ
山中の険しい道にさしかかった
城氏軍に近づいてきたのは、
ぎそう
赤旗で偽装した源氏軍でした。

その軍は持っていた赤旗を
打ち捨て白旗に持ち換え
どつじょ
突如襲いかかってくると、

全方位を敵に囲まれてしまった城氏軍は
さんざんに打ち破られてしまいました。



敵に討たれた者も、崖から落ちて死んだ者も数多くいました。

生き残った兵もバラバラになつてしまいあてもなく逃げ出すしかありませんでした。

総少弐軍の長茂も、傷を負い、よろいを脱ぎ、弓を捨て、逃げる事しかできませんでした。



平氏方の軍を壊滅させたぞ。

一年がかりで準備した罠であつたとはいへ、これほど上手くいくとはな。

きそよしなか
源氏軍 総大将 木曾義仲

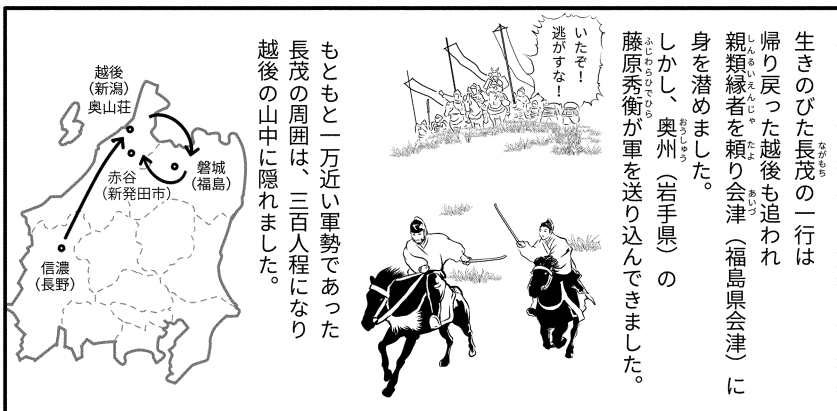
昨年城資永の軍勢に攻め込まれていたら我が軍の負けは免れなかつたであらうに。



こたびの敵の兵数は一万ほどであつたな…

きそよしなか
：木曾義仲軍三千が五万の平氏軍を蹴散らしたと世間に広く伝えるのだ！

だいふでん
大仏殿を焼いた平家に味方するものには必ず罰がくだるのだと触れ回れ！



鎌倉の長茂



熊野の高僧 定任

長茂が
囚人として鎌倉で
過ごしていたある日、
定任という
位の高い僧が
鎌倉の御所を
訪れました。

この定任という人は、
將軍源賴朝が、
自分の身代わりに
修行を積ませている
人物で、
長茂が
師と仰ぐ人物でも
ありました。

お主ほどの武人が、
ただの囚人として
預かられておるといのか。

実に
もったいない。

おそ
恐れ多いお言葉に
ございます

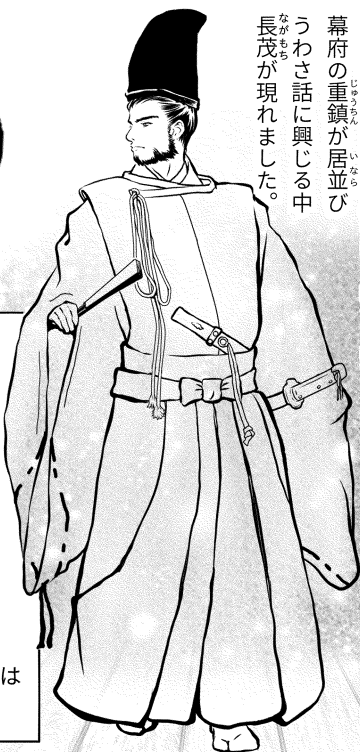
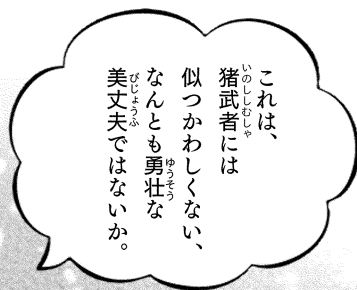
いや、
定任殿の
おっしゃるとおりじゃ

長茂の後見人
梶原景時

梶原景時

これを機に
定任殿と関係の深いお主に、
賴朝様と直接お目にかかる
機会を作つてやるゆえ、

御家人に
加えていただけるように
申し出るが良いぞ。



將軍の謁見の間には
北側筆頭の梶原景時、
南側筆頭の畠山重忠をはじめとした
幕府の重鎮が居並び
うわさ話に興じる中
長茂が現れました。

この時の長茂の姿を見て、
七尺もあるように見えたという
歴史書の記述があります。

七尺といえは2メートル以上と
考えられます。

成年男性の平均身長が
150cm程度とされる時代に
実際にそれほどの身長があったか
どうかは定かではありませんが、
長茂が大きな存在に感じられた事は
間違いありません。

えー、
この「城長茂」
という男は
無双の勇士に
ございます。



平氏の一門として
源氏勢力に
刃向かい
今は囚人の身で
ございますが、

名門の出身で
あることもあり
宿老である
この梶原が
世話係を
しております。

なにとぞお許し頂き
御家人に加えれば、
どれほどお役に
立ちましようか…



かじわらかげとき
梶原景時

梶原殿のおつしやる通り、
囚人として飼ひ殺しに
しておくには
惜しい人物でありますぞ。

過去の罪は許し、
御家人に加えれば
必ずやお役に立ちましよう

ふむ。

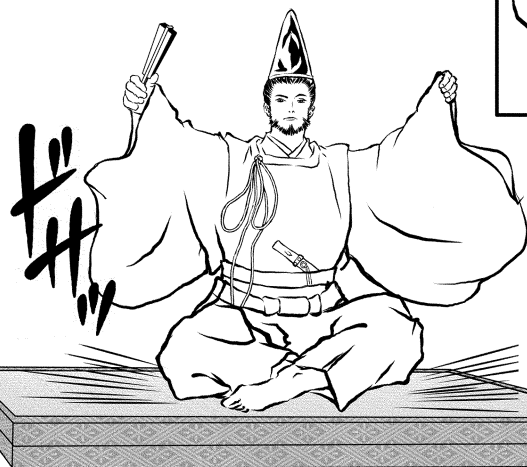
鎌倉幕府 初代將軍
みなもとのよりと
源 頼朝

じょうにん
定任



ながもち た い ふ ま
一同は、長茂の立ち居振る舞いに感心し、
かじわらかげとき じょうにん ほ なつとく
梶原景時や、定任の褒め言葉にも納得しました。

ながもち
しかし、長茂は、
みす 御簾の前でまで来たところで、振り向くと



御簾に背を向けて
上がり框（かまち）に
座ってしまいました。

将軍様に
背を向けて
座るなど、
何たる無作法、
一体何を
考えておる。

お主が
座るのは
その手前の床じや。
その上り框
（かまち）は
頼朝様の
お出ましの
場なのだぞ。



ながもち
長茂は「それは知らなかった」と言つて立ちあがり、出ていってしまいました。



これには推薦人の
定任もカンカンに
怒り、

御家人への推薦は
取り消しじや！

將軍は
何も言わず
立ち去ってしまいました



梶原殿のご厚意には
感謝しておりますが
今はまだ敵の大將に許しを乞うて
頭を下げられる程の
気持ちの整理がついてはござらん。

御恩に
報いるためにも、
いずれはお役に
立ちますゆえ、
今しばらく
ご辛抱頂きたい。

まったく、
次があるとは限らんぞ。

それにしても、
お前ほどの男を
飼ひ殺しにしておくのはおしいのう。



かじわら かげとき
梶原景時

ながもち
おとし
後見人として長茂の面倒をみる。かつては「讒言によって人を陥れる人物」というイメージを持たれていた。これは源義経を主人公とした物語で、敵役としてすることが多かったため。しかし近年は、教養があり、主君に忠実で事務能力に優れた官僚的人物としての評価が定着しつつある人物である。

讒言（ざんげん） 事実を曲げたり、ありもしない事柄を作り上げたりして、その人のことを目上の人に悪く言うこと。

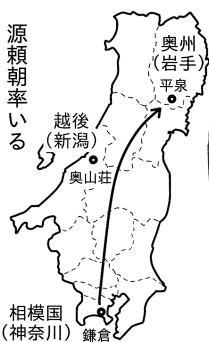
おうしゅうかつせん

奥州合戦

それから一年ほどで
源頼朝の勢力は
全国のほとんどの地域を
その支配下に置いた。



奥州の藤原さえ倒せば、
ついに全国が
我が支配下となる。



源頼朝率いる
鎌倉軍は、
奥州藤原氏の征伐のため
準備を始めた。



四人であるから
自分の旗印を
用いるのが
忍びないだろ？

將軍 源頼朝

そんなことは
気にせず使え。

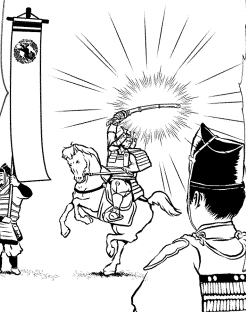
では、こちらの
城家の旗印を使わせて
いただきます

この旗を見て
昔の部下たちが拙者の存在に
気づくかもしれませぬ



本当にあつたぞ。
城氏の旗印「獅子に牡丹」だ！

ここに長茂様がおられるはずだ



城家伝来の「野狐の太刀」を
掲げておられる。
あれは確かに長茂様じゃ！

頼朝様のお供をしていると
聞いて参りました！

必ず再起していただけるものと
信じておりました！

次々と集まってくる
かつての部下たちの中に
混ざって
ひととき大きな声が…

兄上！

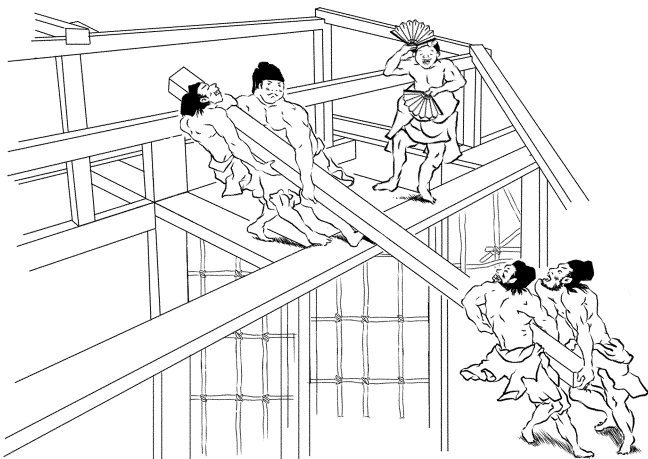
は、
板額！？

お会いしよう
ございました！

板額がこの戦に参加したという事実は
歴史書には残っていませんが、
のちの活躍を考えれば
戦の経験があったのではないかと
考えることはできます。







この後、幕府軍は奥州を制圧、源頼朝の全国統一がほぼ完成した。
この戦を機に、後見人の梶原景時の尽力もあり、長茂は、鎌倉幕府の御家人と認められ、平和な時をすごしていた。

けんきゅう
建久三年(1192年)六月十三日

頼朝様は、新築しているお堂へ様子を見に行かれました。
畠山重忠、佐貫広綱、城長茂、工藤行光、下河邊政義達が、
梁や棟木を引き上げていました。

力士数十人分ほどもありそうな腕力で、一辺に上げてしまうので、
集まった見物人達はその力にビックリしています。

頼朝様も大層感心しておられました。(吾妻鏡)



日々、このように過ごせるのは、
何よりも梶原殿が、
囚人だった拙者を
気に掛けていただいたおかげで
ございます。

そなたのように
勇猛な武士を失わずに
済んだことが
武士の世の繁栄に繋がるもの。

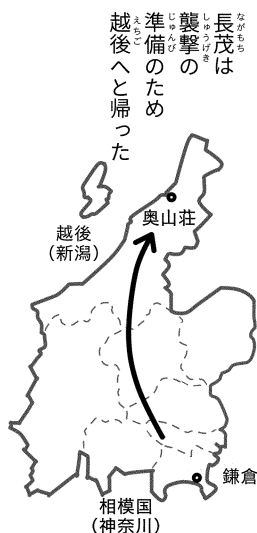
これからも、頼朝様の治世の
秩序と規律を守る手助けを
してもらおうぞ。

初代將軍
源頼朝の死後、
大きな
権力争いが
起きた。

頼朝の信頼が厚く、
大きな権力を持っていた
梶原景時は、
他の武士から妬みや怨みを受け、
鎌倉を追放された。



景時は一族とともに
鎌倉を離れる道中で、
襲撃され、
一族33名の首が
路上にさらされた。



…梶原殿。
貴方に救ってもらった恩、
忘れはしない。

あなたの求めた
秩序と正義の国造りのため
拙者が鎌倉を
滅亡させてみせましょうぞ！



今回の仇討ちには
資家、資正を
連れて行く
ことにした。

資盛、
そなたには
この奥山荘に
留まってもらおう。

資盛の弟 すけまさ
資正

資盛の弟 すけいえ
資家

何故にございますか、
梶原殿は叔父上だけではなく、
この城家の恩人にございます。

仇討ちには、
弟たちだけではなく、
この私も、
ぜひお連れ下さい。

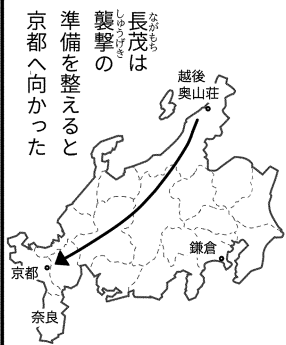
じょう すけもり
城 資盛

この仇討ちは、
幕府そのもののへの抵抗と
同じ意味を持つもの。
どのような結末になるか
分からぬ。

城家の名を残すため
ここ越後に
最後の砦を
残しておかねばならん。
それが、お前なのだ、
資盛。

この太刀を
預ける。

資盛、
これより、
しばしの間
城家の棟梁は
お前だ。



小山朝政

おやまともまさ

ここが梶原殿を、
亡き者としたのち、
梶原殿に代わって
播磨国守護となった
幕府宿老の大番役
小山朝政の宿舎だ。

まずは、おやまともまさ
を引き摺り出し、
捕えるぞ！

その後、帝より
鎌倉幕府を
討ち滅ばす司令を頂き、
梶原殿の恨みを
晴らすのだ！

よし行くぞ！

敵襲！
直ちに反撃しろ！

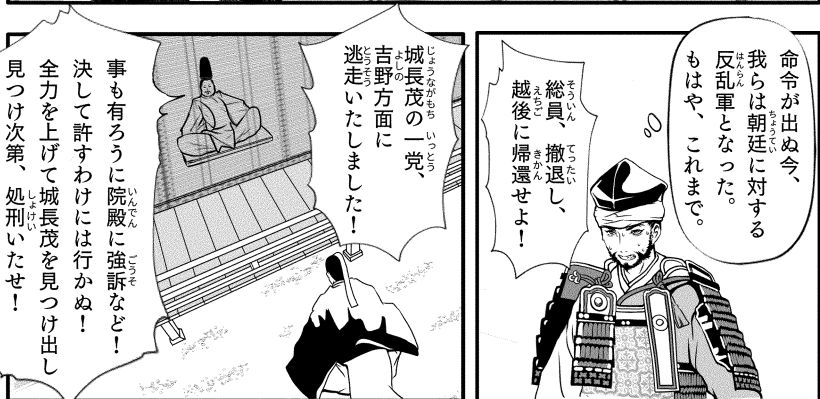
ながもち おやま ぐんぜい
長茂と小山の軍勢は
しばらく戦闘を繰り広げたが

小山朝政はどこだ！

小山を出せ！

今、
この邸宅には
おられぬ！
土御門東洞院殿に
行かれた。

何だと、
ならば
土御門東洞院殿に
向かい
多少強引にでも
帝に
訴えかけるしか
あるまい！

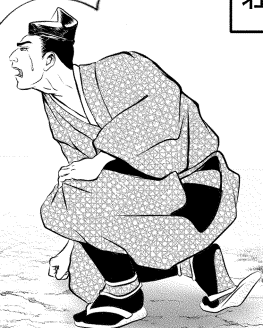




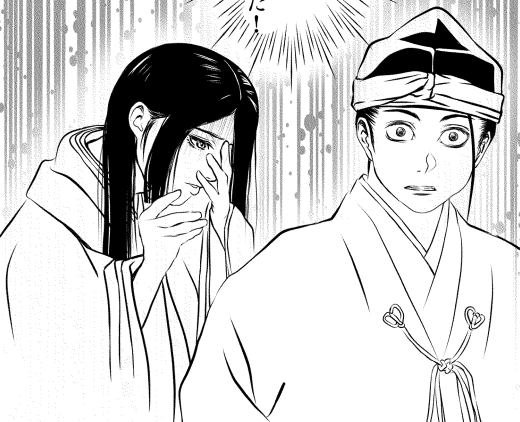
越後 奥山荘 えちご おくやまのしょう

でんれい
伝令！

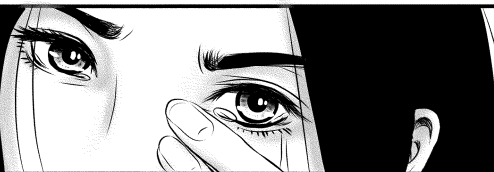
おやまちさま
小山朝政の
みがら かくほ
身柄の確保に失敗、
じょうと せんじ
上皇様の宣旨も
受けられず、
ながもち
長茂様が…



ながもち
長茂様が
うちじ
討死に
なされました！



ズッ



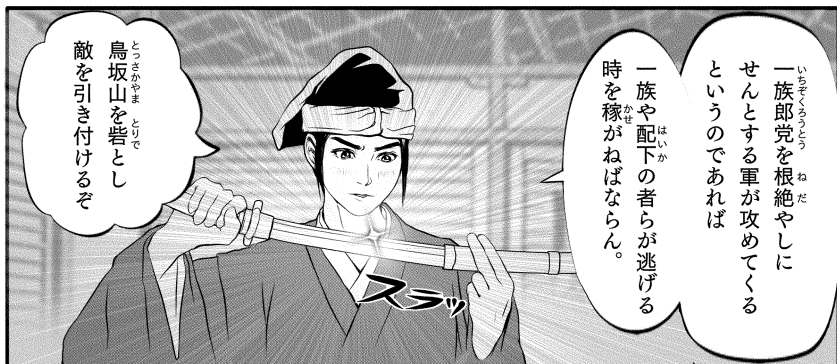
いんしんしやうぐき
院殿を襲撃し、
ごうご
強訴に失敗したとあらば、
つみ
その罪は
いちぢくしやう
一族郎党にまで及び、

じやうけ
城家を
ほろ
滅ぼさんとする軍は
すぐにでも
やってまいりましょう



おくやまのしょう
奥山荘の
とうしゅとして、
すけもり
資盛様、
いかが
なされますか。





一族郎党を根絶やしに
せんとする軍が攻めてくる
というのであれば

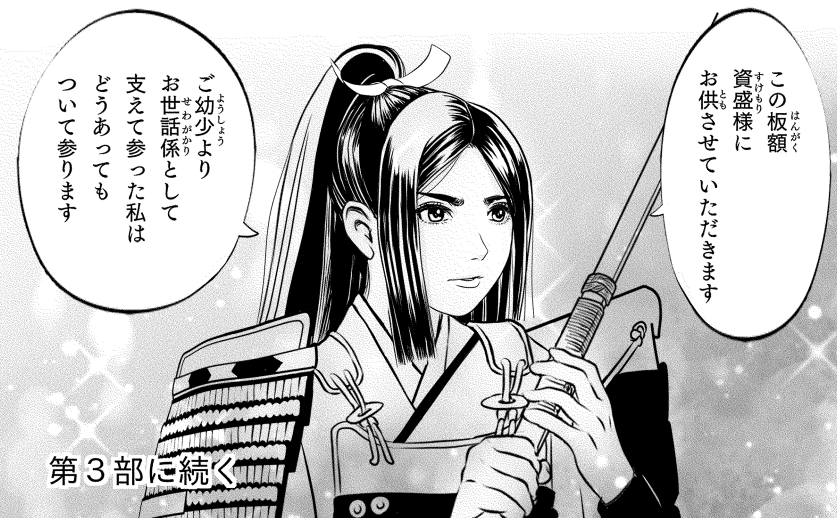
一族や配下の者らが逃げる
時を稼がねばならん。

鳥坂山を砦とし
敵を引き付けるぞ



鎌倉幕府のみならず
朝廷まで
敵に回したとあらば
我らに勝ち目はない。

我らの最後の戦には
どうあっても
ついて参りたいと申す
者だけを
共とする

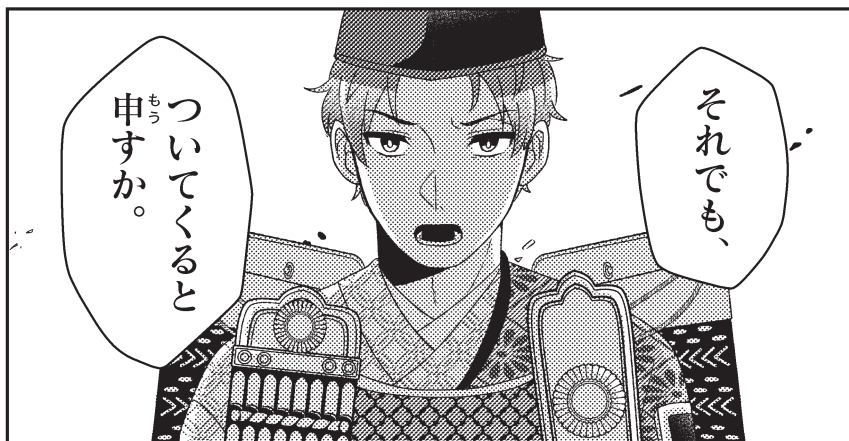


この板額
資盛様に
お供させていただきます

ご幼少より
お世話係として
支えて参った私は
どうあっても
ついて参ります

—
第三部
—

鳥とつ
坂さか
山やま
の
戦たたか
い



我々は城家の方々に、
とても良くして
いただきました。

資永様には智を学び、
長茂様には武を
学んだ恩がございます。

そのお子である
資盛様に恩返しが
しとうございます。

ご兄弟の無念は
ワシらが晴らすんじや！

そうじゃそうじゃ！

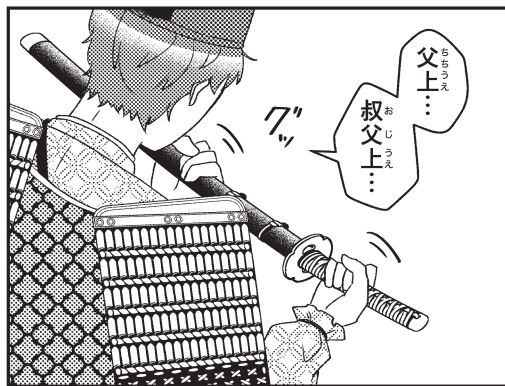


資盛様。資永兄上と長茂兄上の
ご威光は未だ衰えては
おりませぬ。



父上…
叔父上…

ズッ

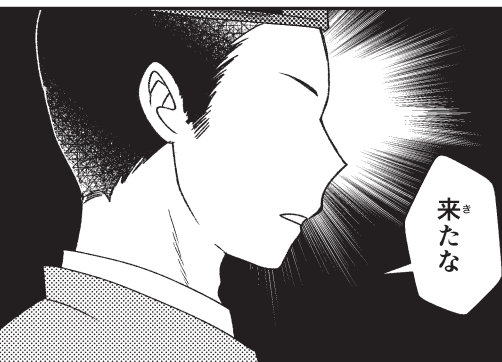
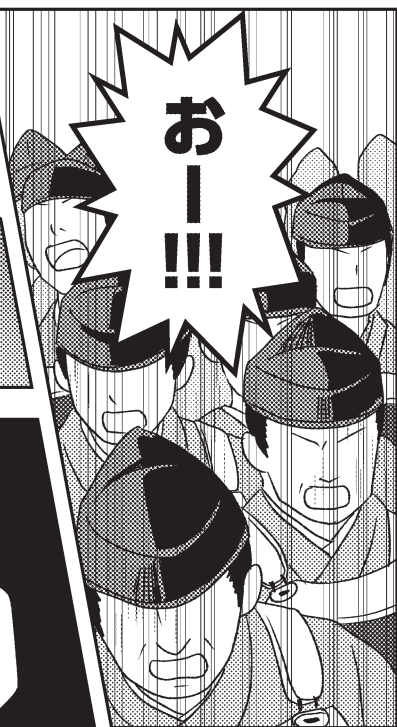
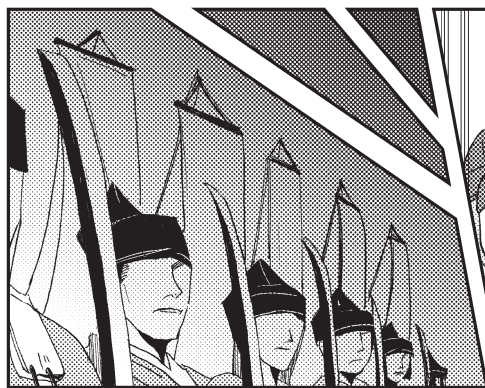


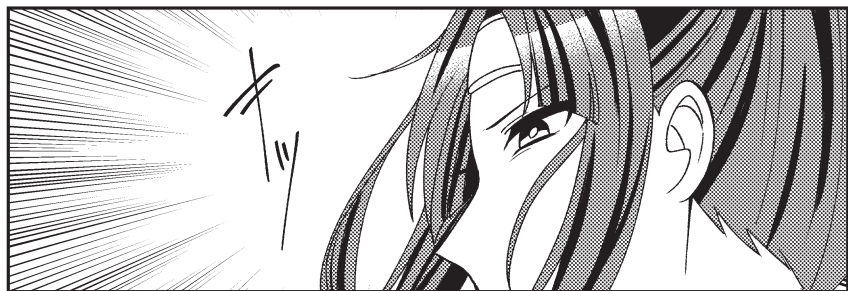
ズッ…

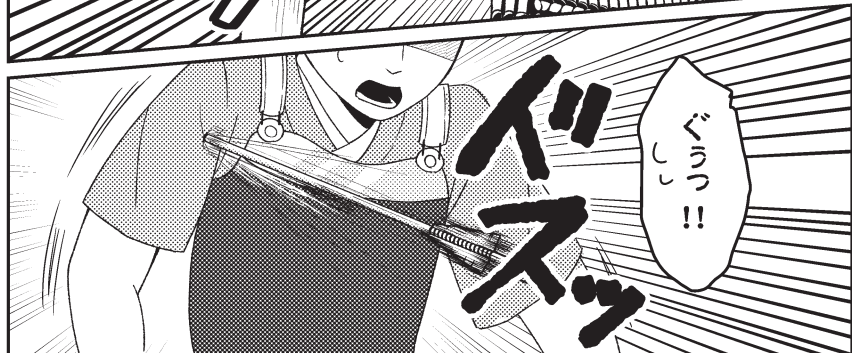
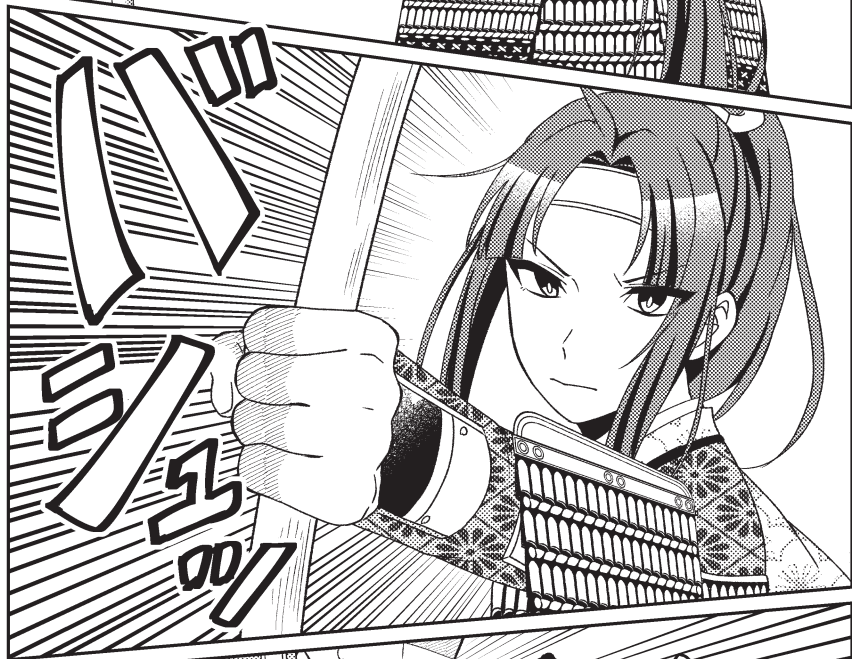
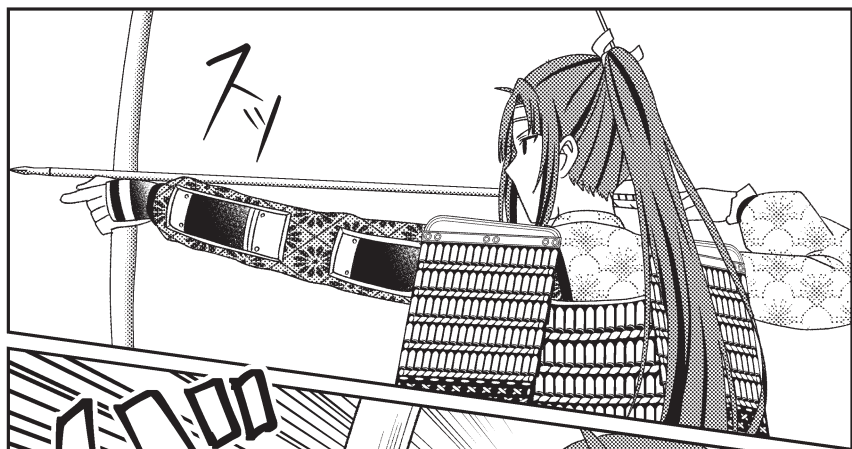
この野狐の太刀が
ある限り、

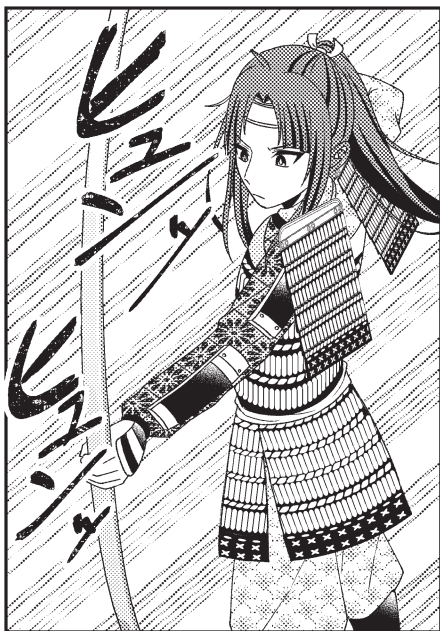
天は我々に味方して
くれるはずだ。













ひめさま
姫様!!
あそこです!!

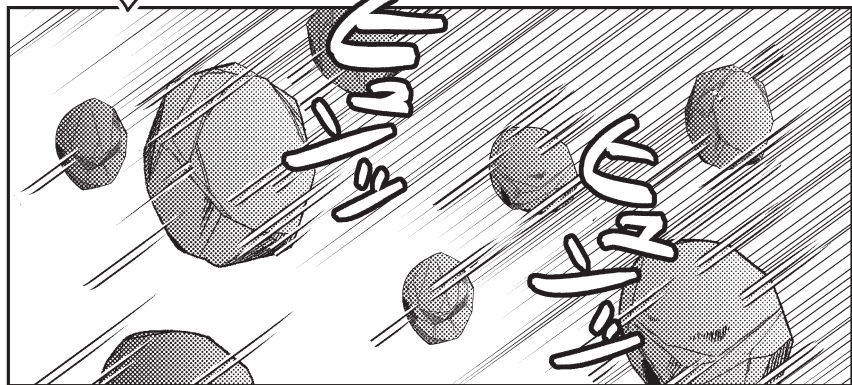
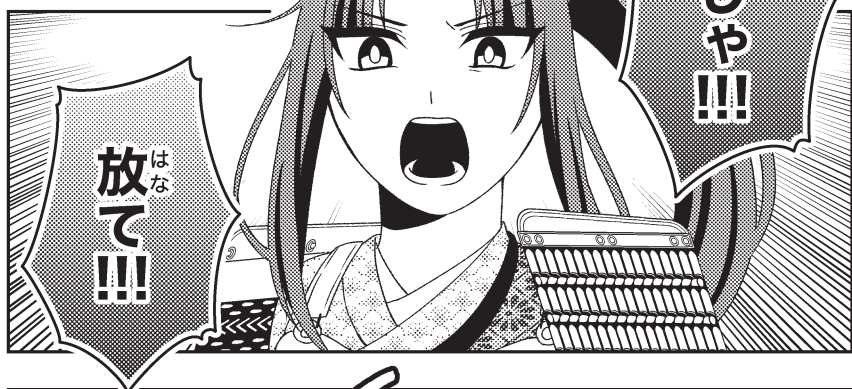
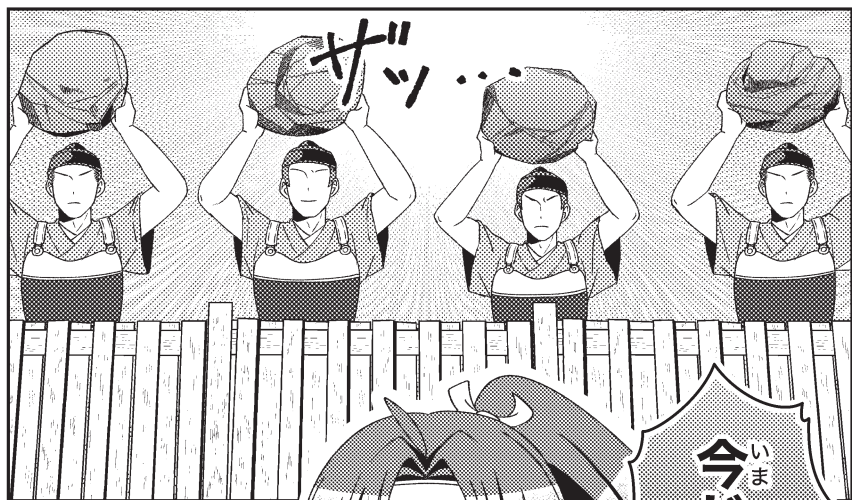
ひめさま
姫様!!
こちらに!!

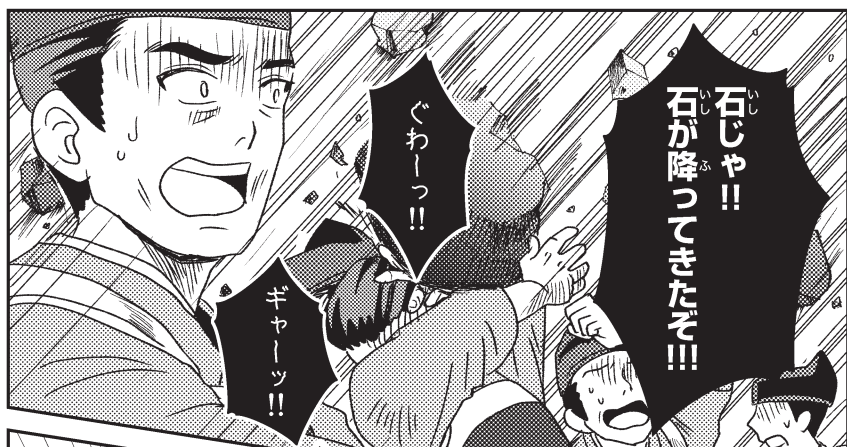


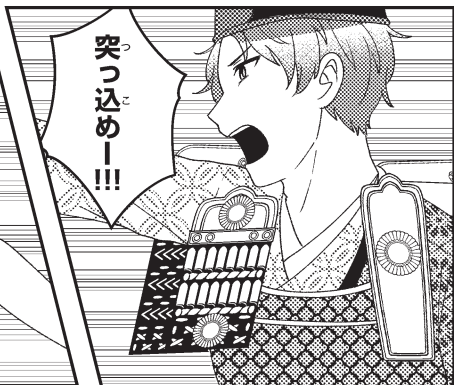
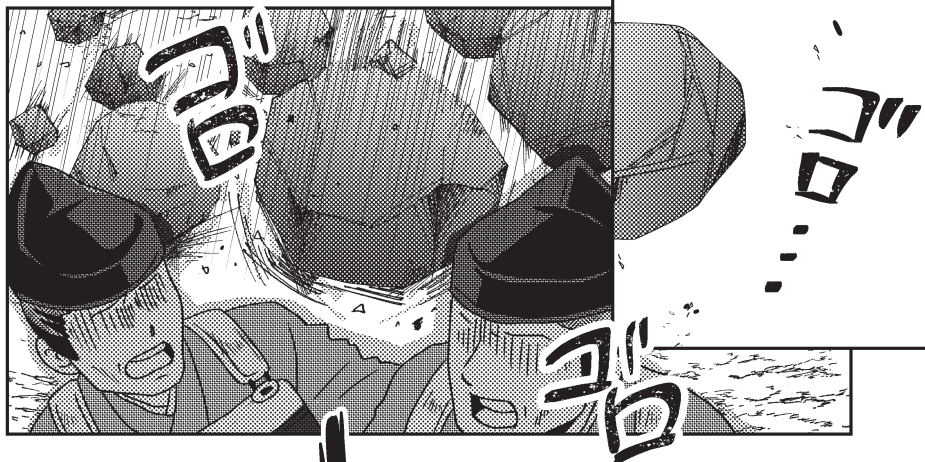
後ろの陣まで
敵を引きつけるのじゃ!

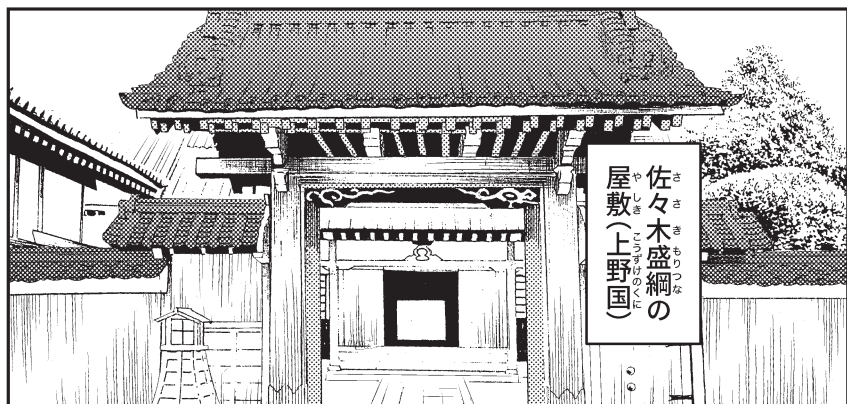
よし、前衛は一旦
陣を下げよ。

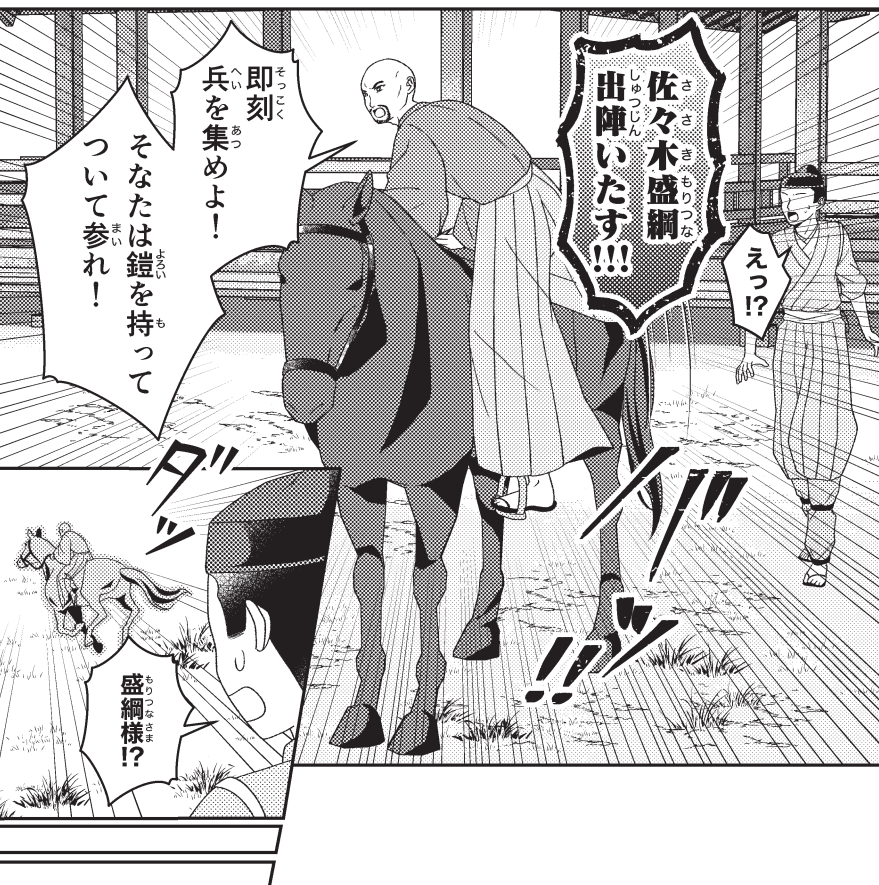
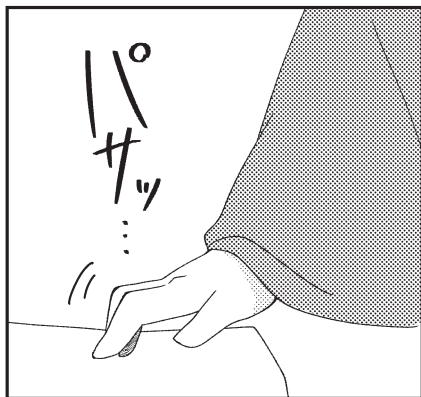


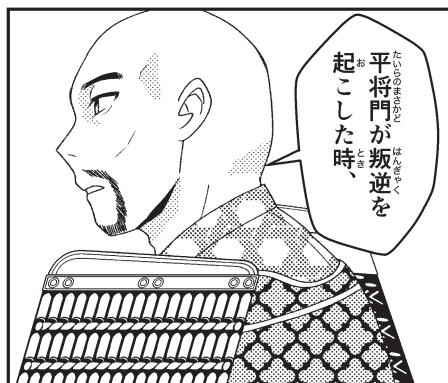
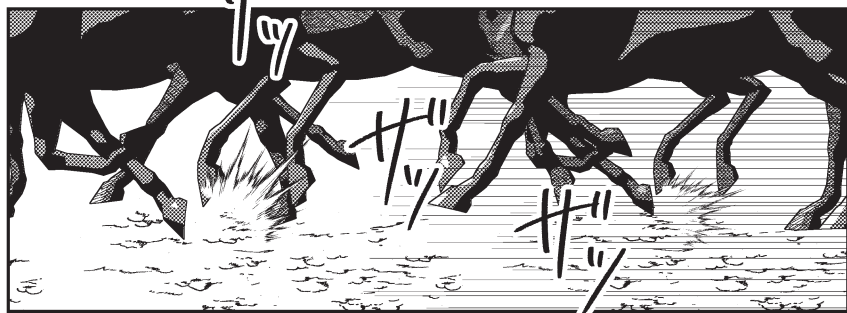


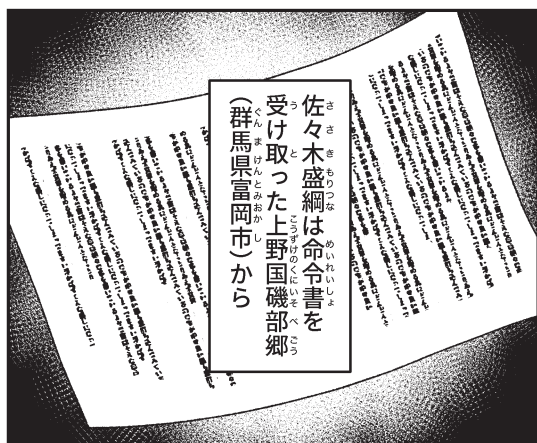
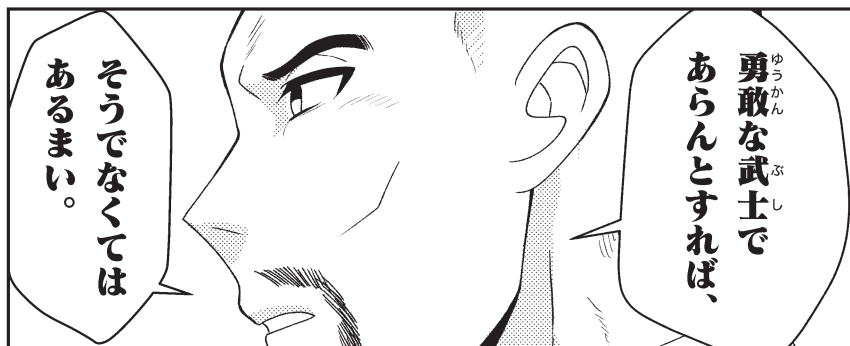


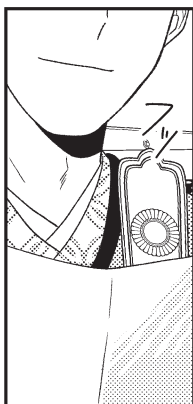
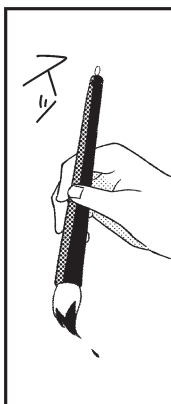
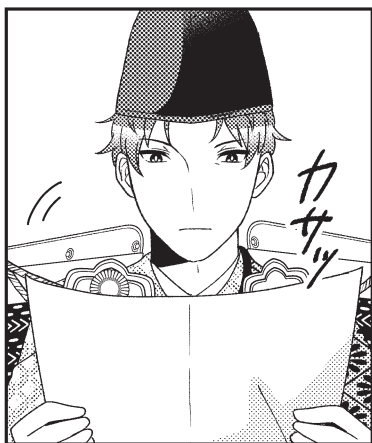


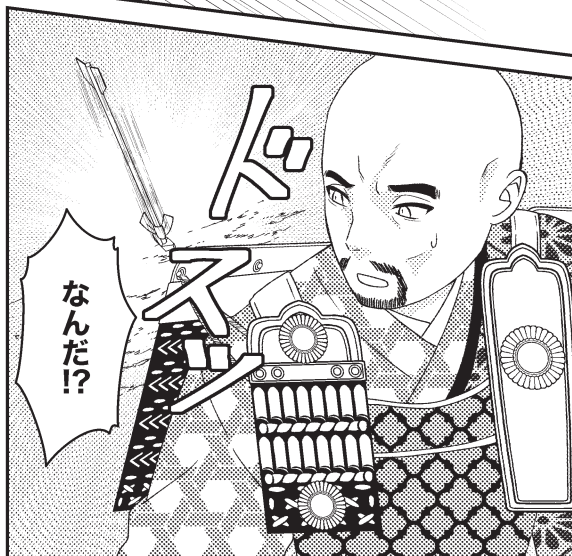
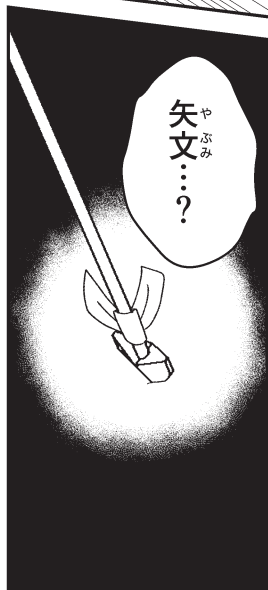
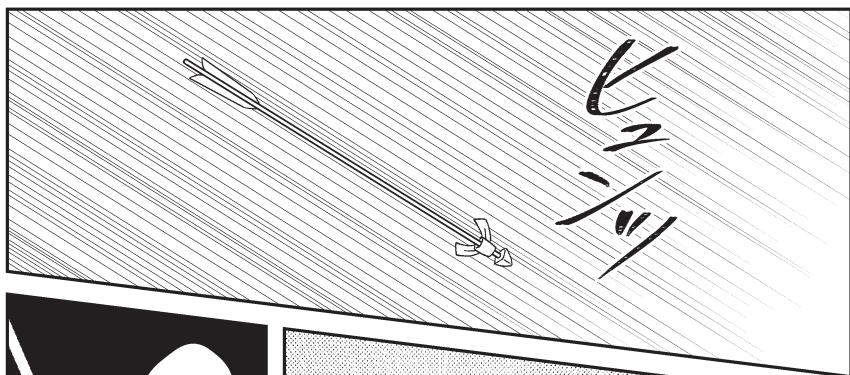
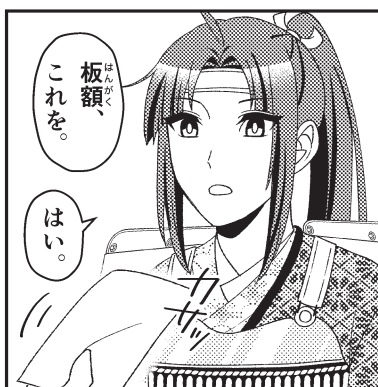
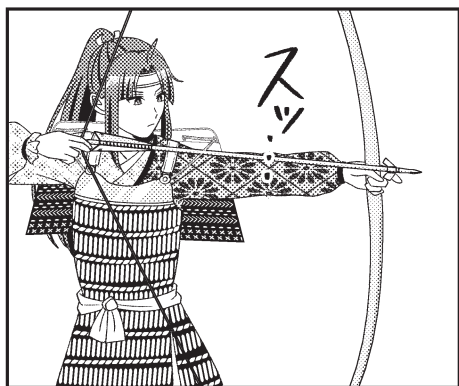


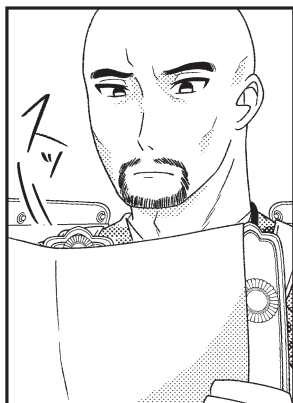
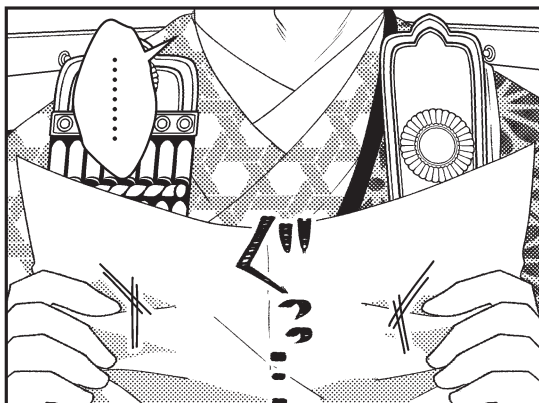


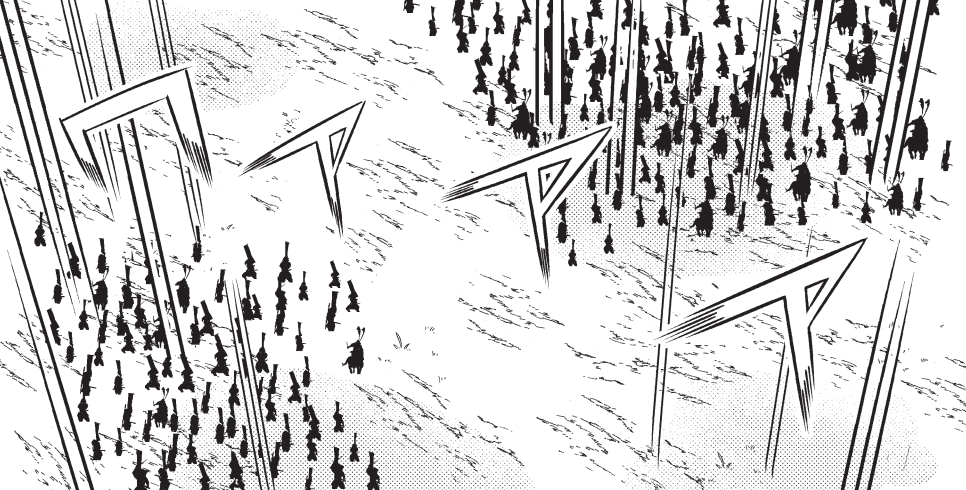






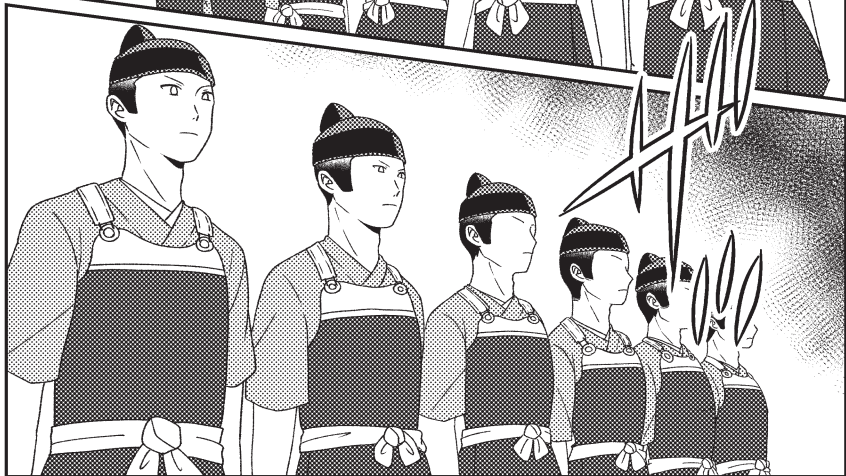
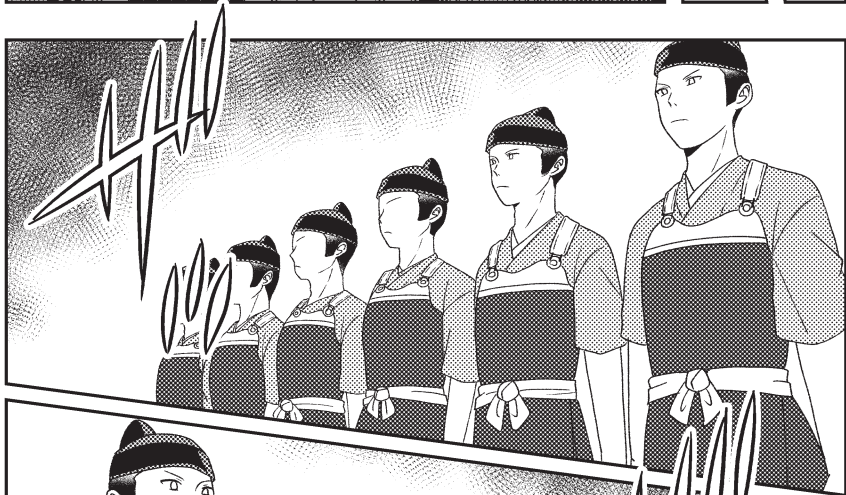
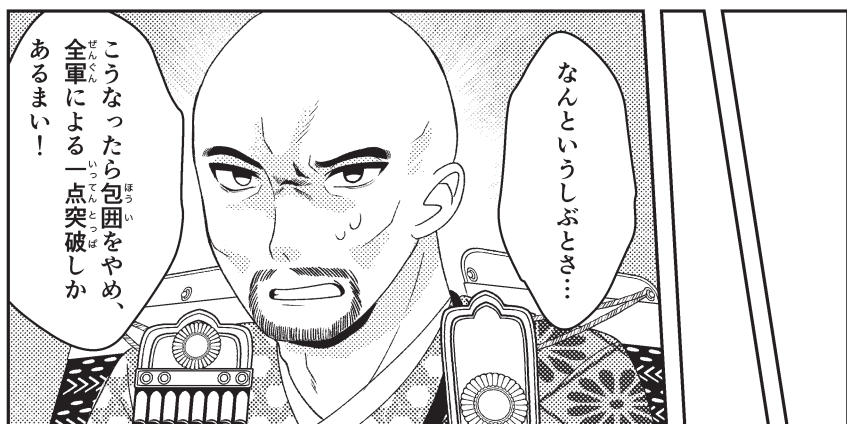


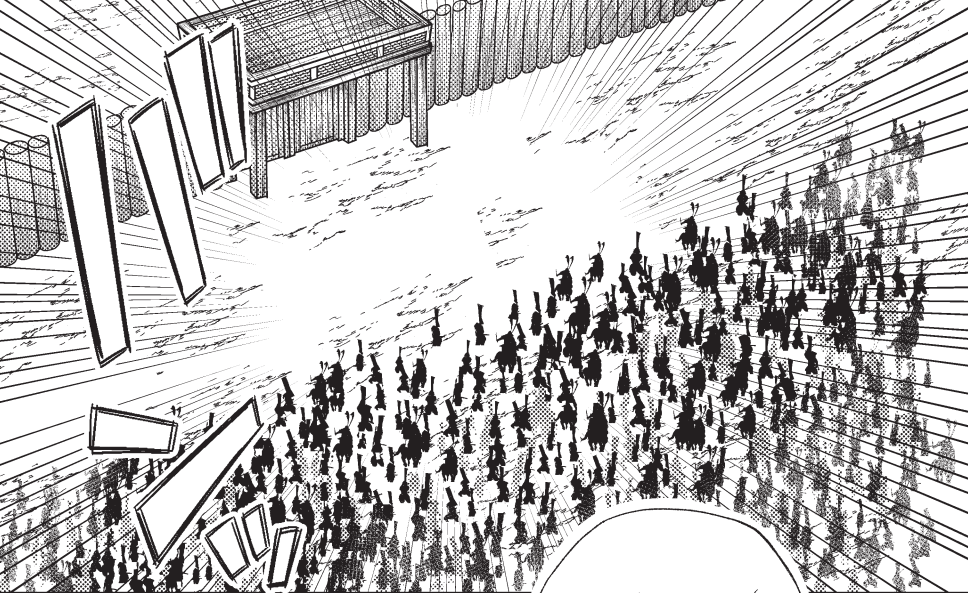




開戦当初は幕府軍を圧倒し、
その後も次々と押し寄せる
幕府軍を返り討つ城氏軍だったが、

幕府本隊が到着したのちは
多勢に無勢、徐々に
その勢いを失い始めた。





じゃがな、
いますぐ降ると申せば
許してやらんこともないぞ。



さあ、跪いて許しを
請うのじゃ!!!



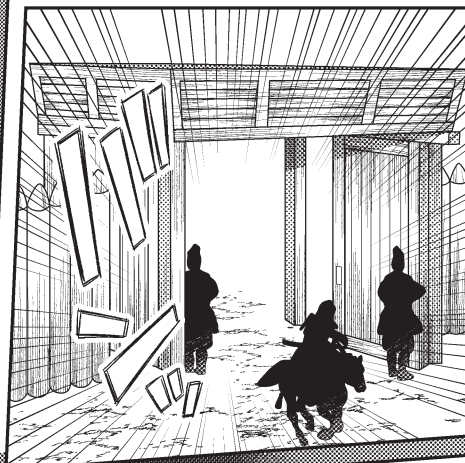
この大軍を見よ!!!

貴様らに勝ち目は
ないぞ!!!

城じやうし氏しの大將たいしやう、
城小太郎資盛じやうこたろうすけもりは
ここにおるぞ!!

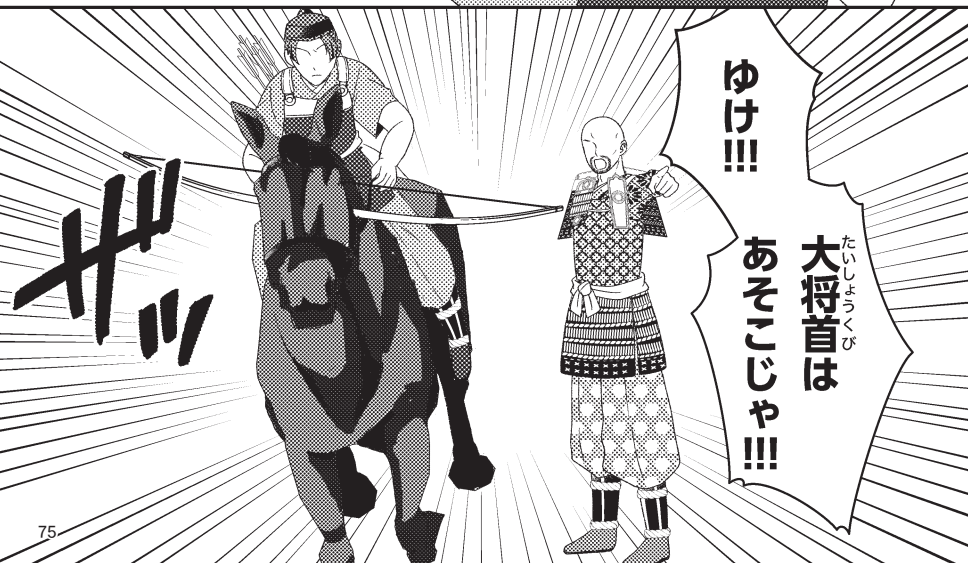
我われこそはと思おもわん者は、
こここゝに参まゐれ!!

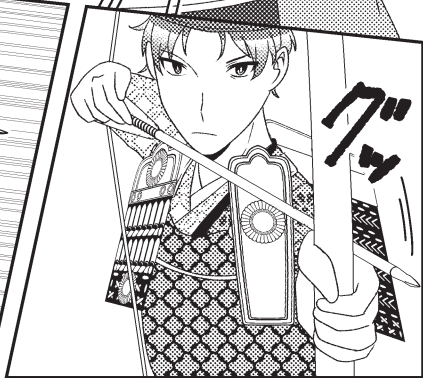
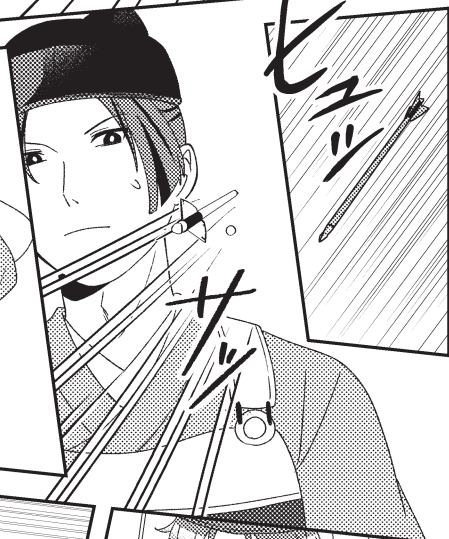
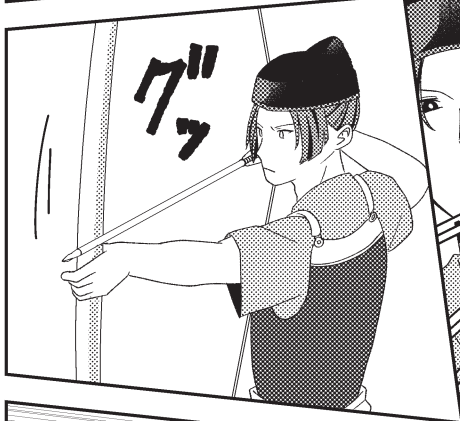
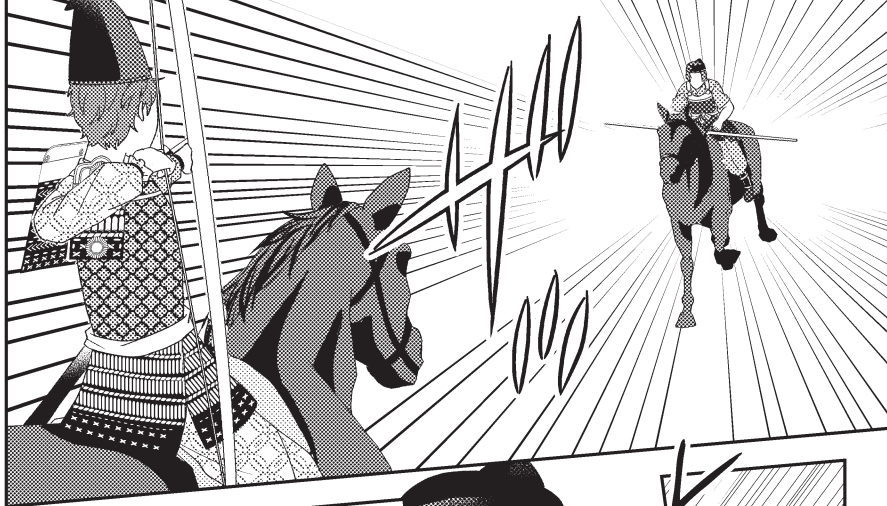
だが、お前まえたちの中なかに、
この私わしを倒たおせる程ほどの者ものは
おるまい!!!

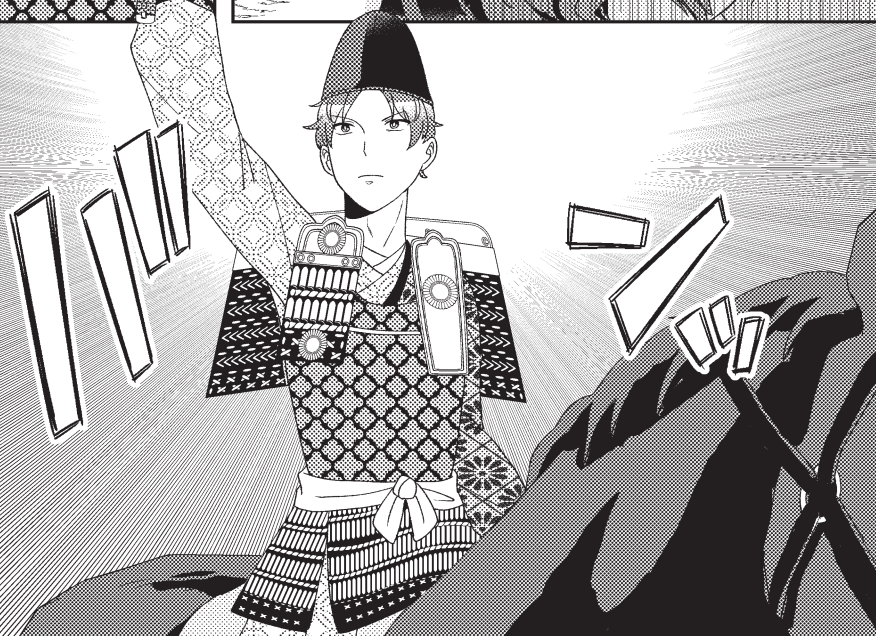
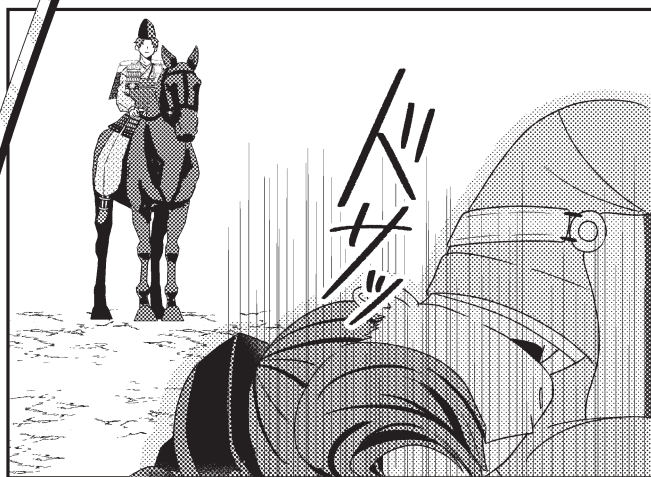
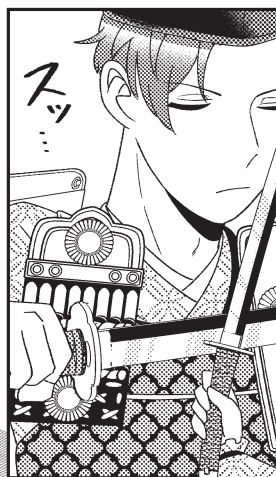
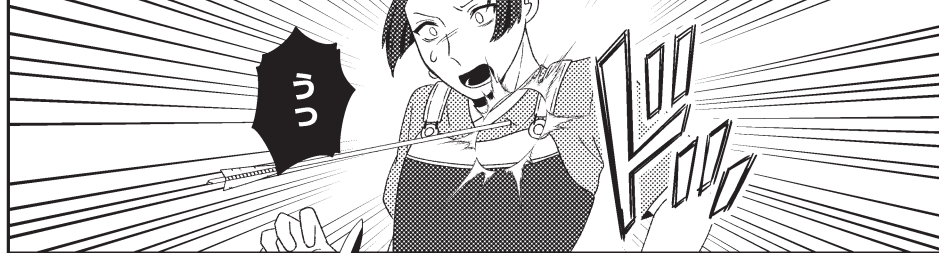


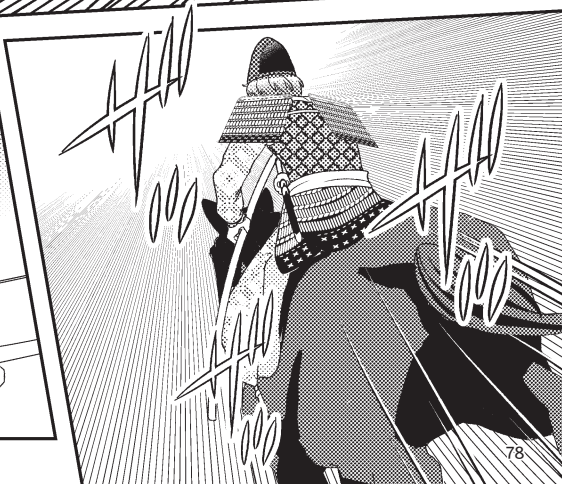
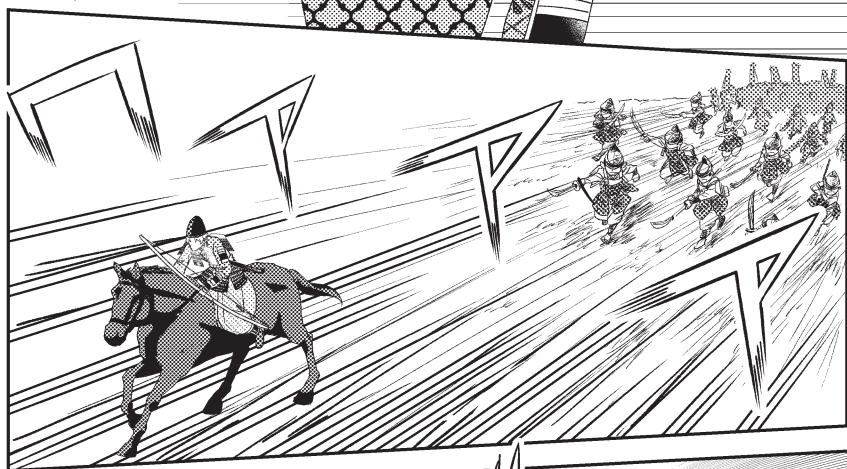
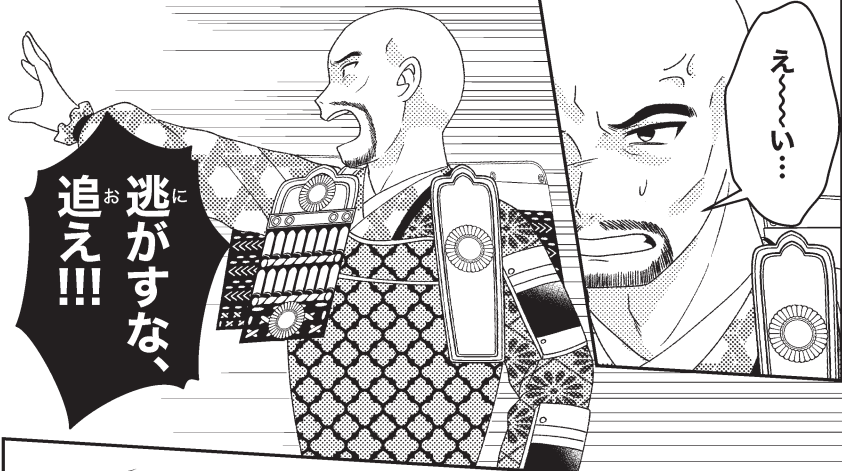
何なに!?

遠とおからん者ものは音おとに聞きけ、
近ちかくば寄よって目めにも見みえ!!











やあつ!

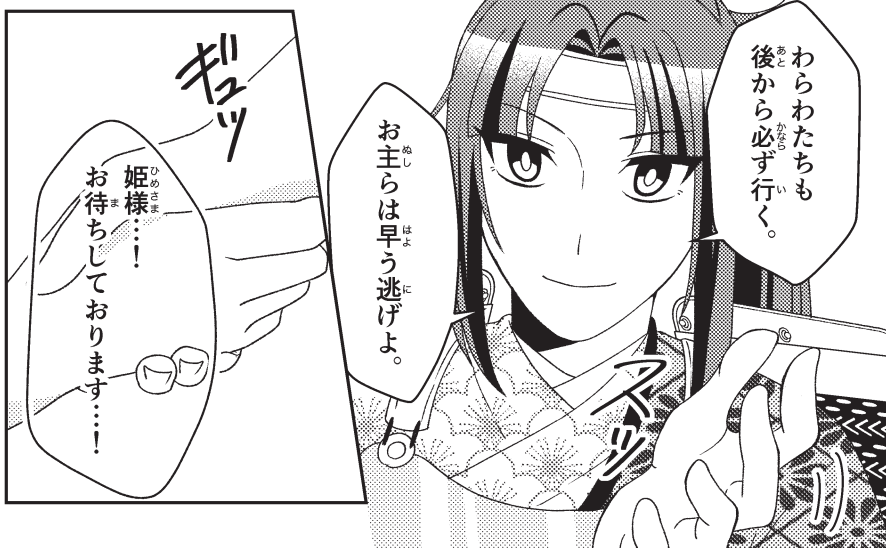
やあつ!

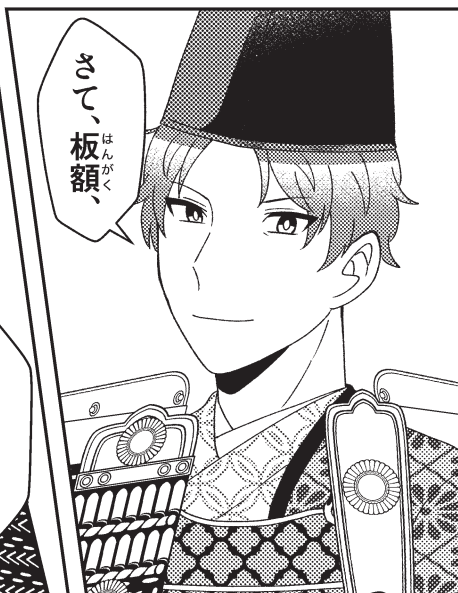
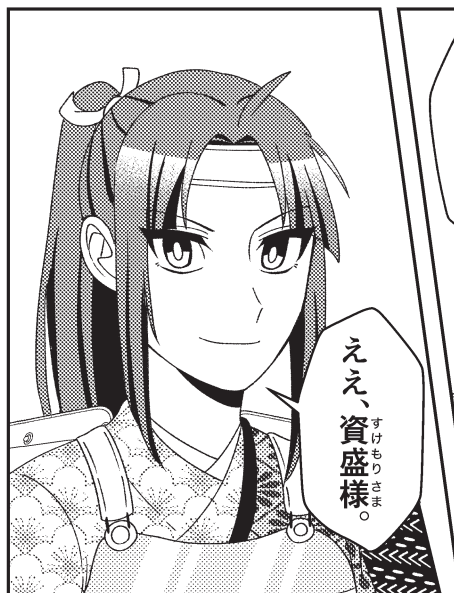
やあつ!

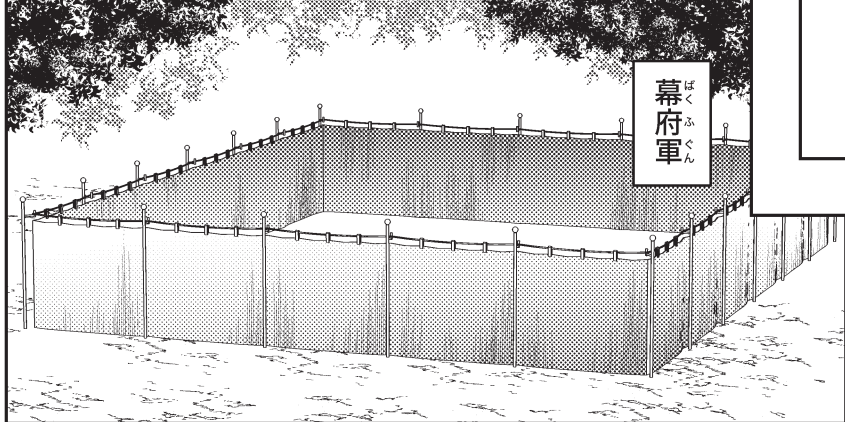
ギャーツ

ぐぬっ...

退^ひけっ、
い^{いたん}たん^ひ
一旦退^ひくのじゃ!!!







幕府軍
ばくふぐん



やはり、
此度の戦の要は、

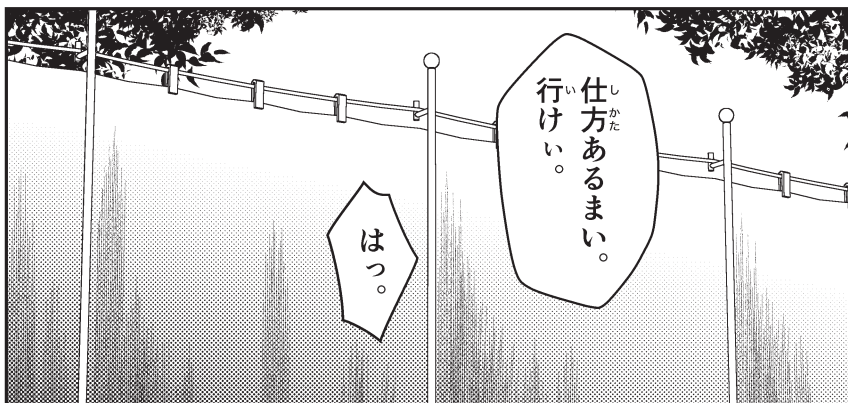
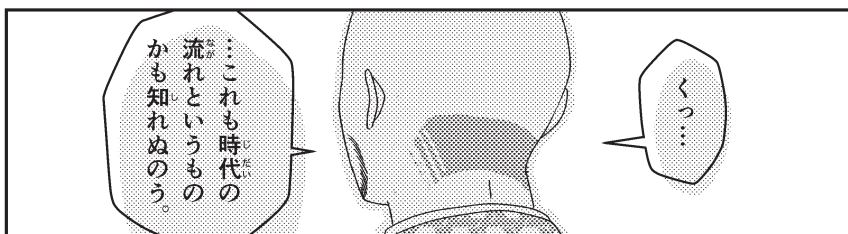
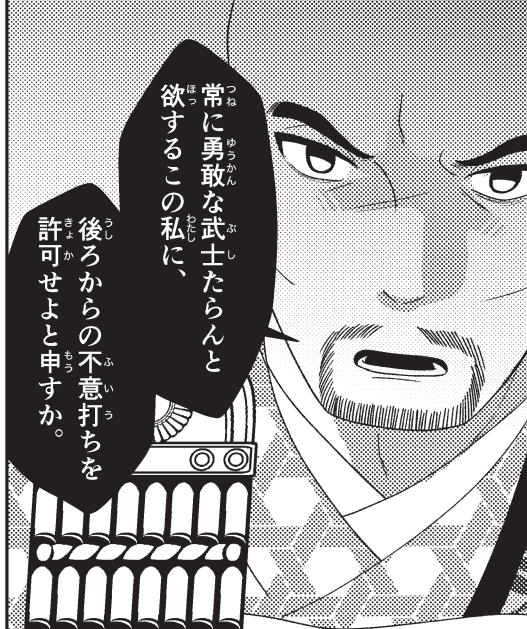
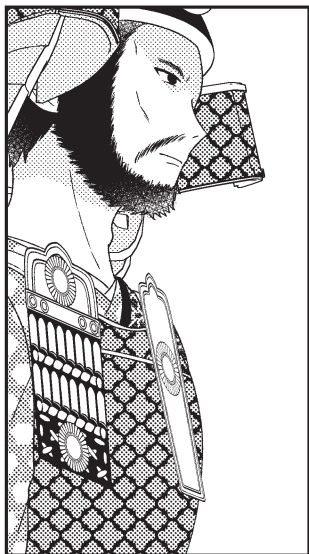
あの弓の名手に
任ざいましょう。

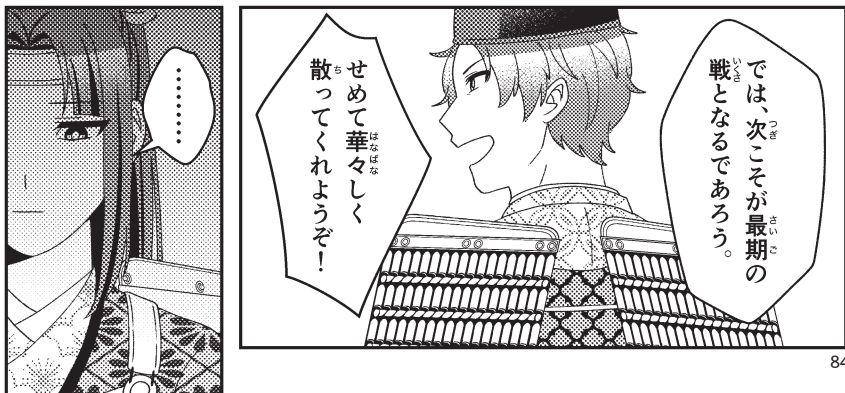
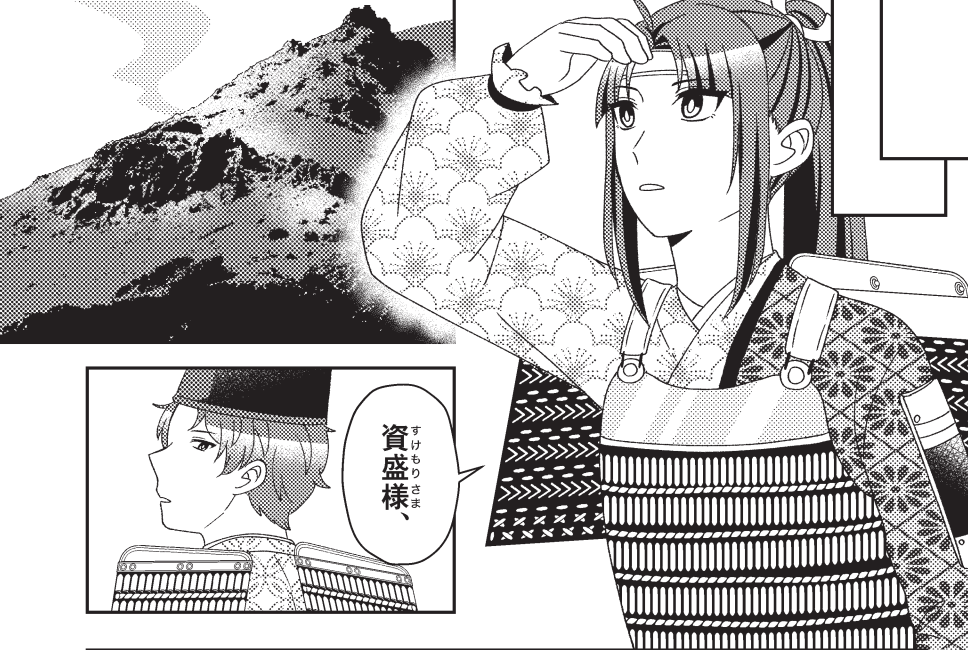


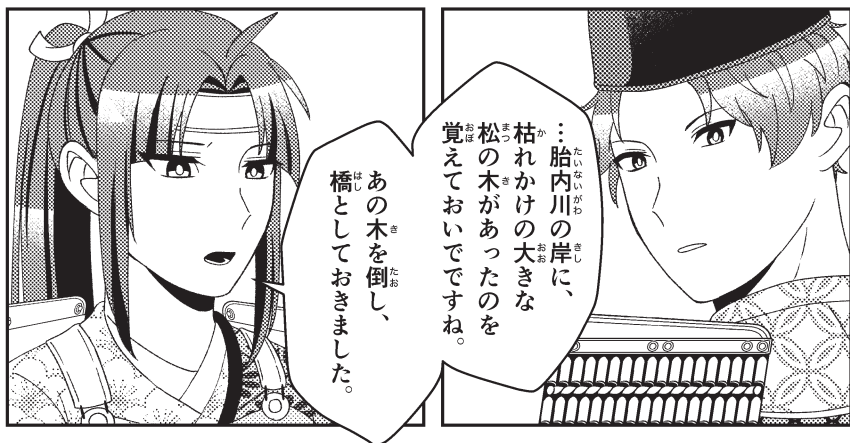
ふじさわきよちか
藤沢清親

もう一度、軍を正面に
集めて下さいますれば、

敵の目がそちらに
集まっておる間に
拙者が裏に回り込んで、
弓で討ち果たして
ご覧にいれましょう。







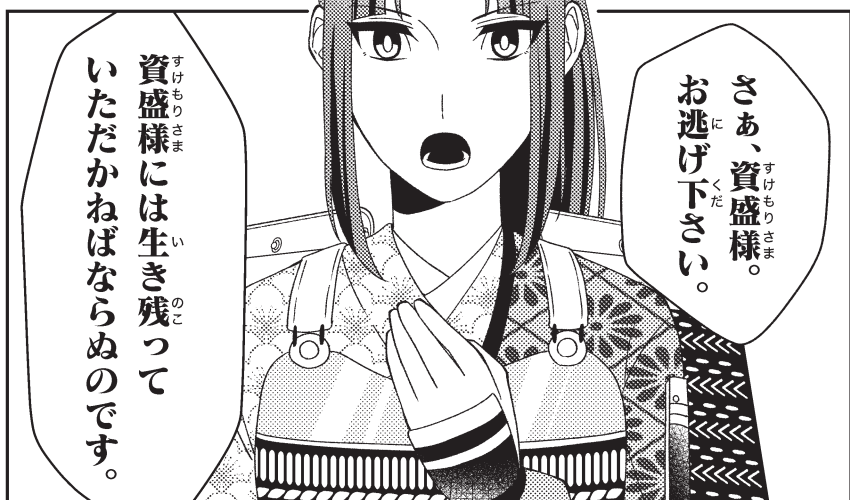
：胎内川の岸に、
枯れかけの大きな
松の木があったのを
覚えておいでですね。

あの木を倒し、
橋としておきました。



川を渡って、
北へ向かえば、
出羽国へと
通じております。

出羽は城家発祥の地。
必ずや庇護を
得られましょう。



さあ、資盛様。
お逃げ下さい。

資盛様には生き残って
いただくかねばならぬのです。



何を…!?

この期に及んで、
わたしに
私に逃げると申すのか!!



なっ…!?



戦って死んだのだと…

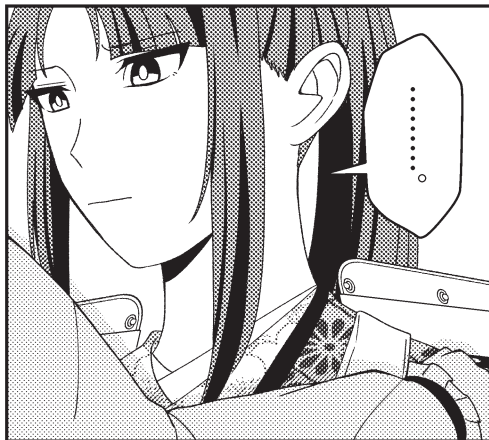
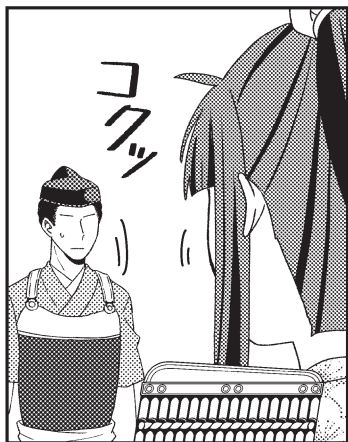


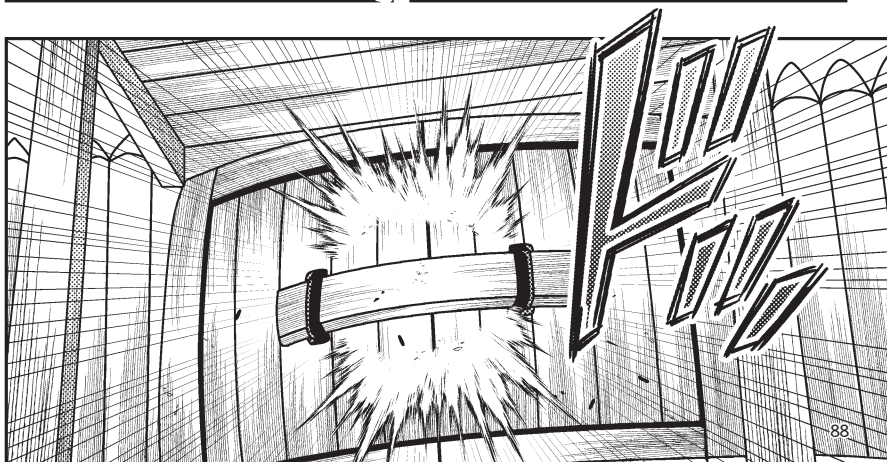
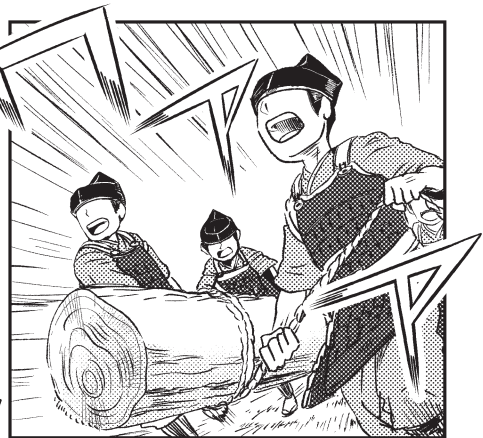
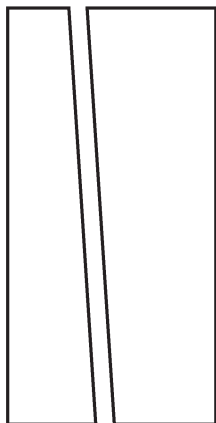
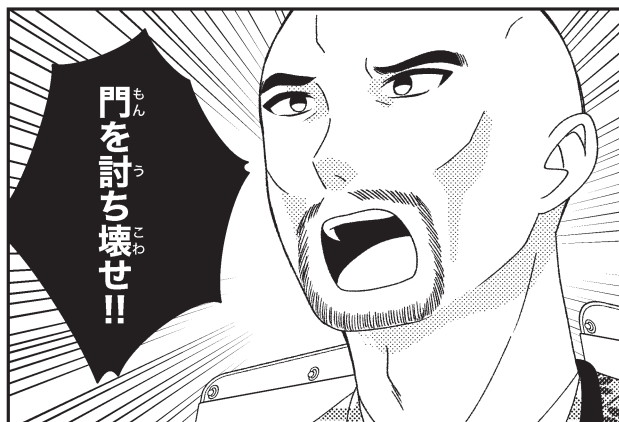
民と共に誇りを守って
死んだのだと、父上
にお伝え申すのじゃ。



わたしは、この、

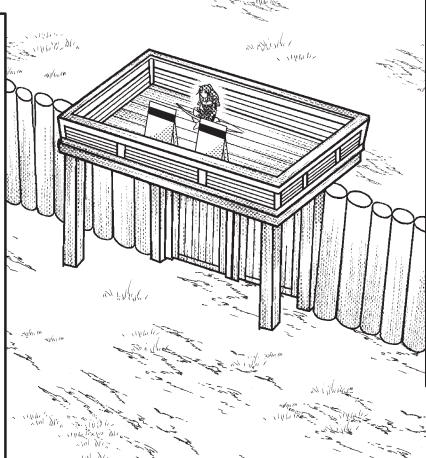
父上と叔父上の弔い合戦にて、
果てると決めて参ったのじゃ。





へい士達を逃がし、また、
城家の血を絶やすまいと
大将、城小太郎資盛をも
逃がした板額。

いまは一人きり、鳥坂城に残り、
矢倉の上で幕府軍を迎え討たんと
していた。



資永兄上、
長茂兄上……

お二人のように
なりたい一心で、
幼き頃より己が技を
磨いてまいりましたが、

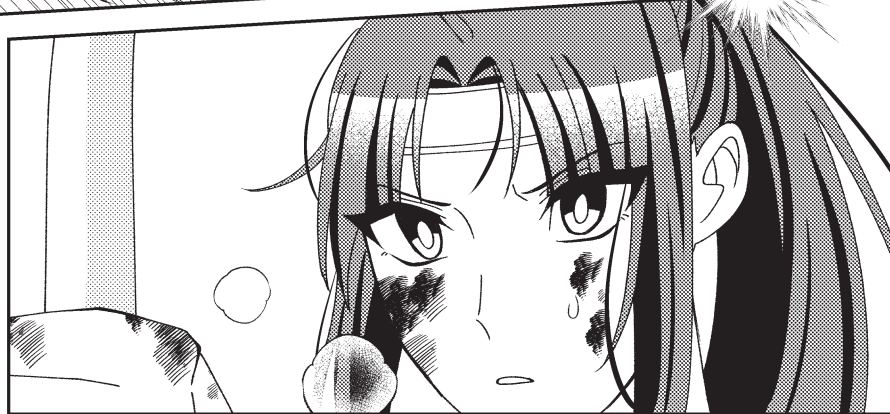
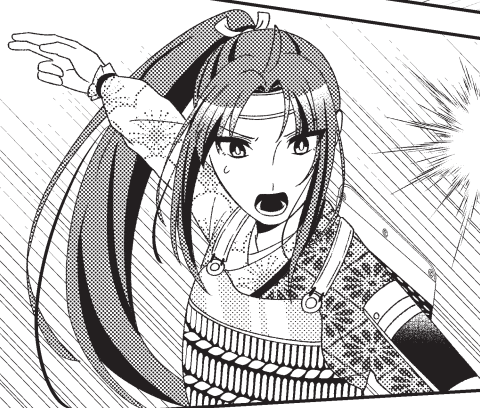
このような形で皆の
お役に立てて嬉しゅう
ございます。

板額、

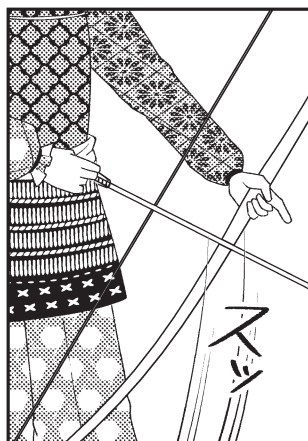
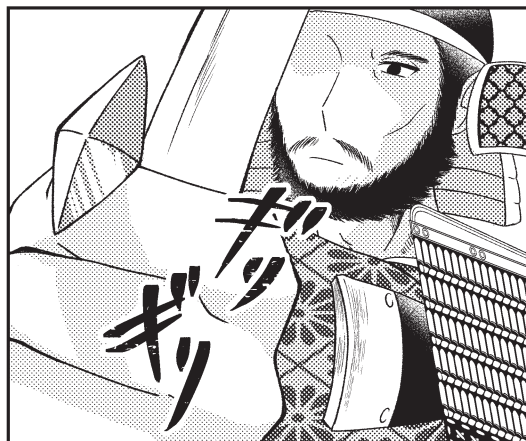
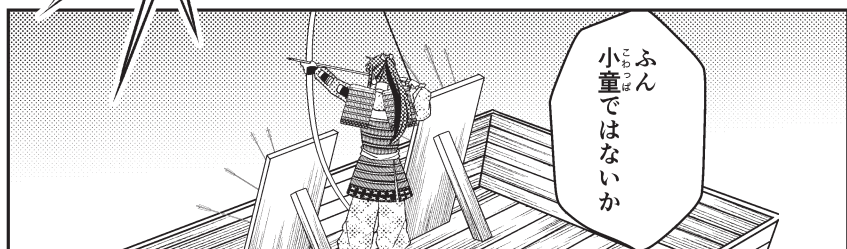
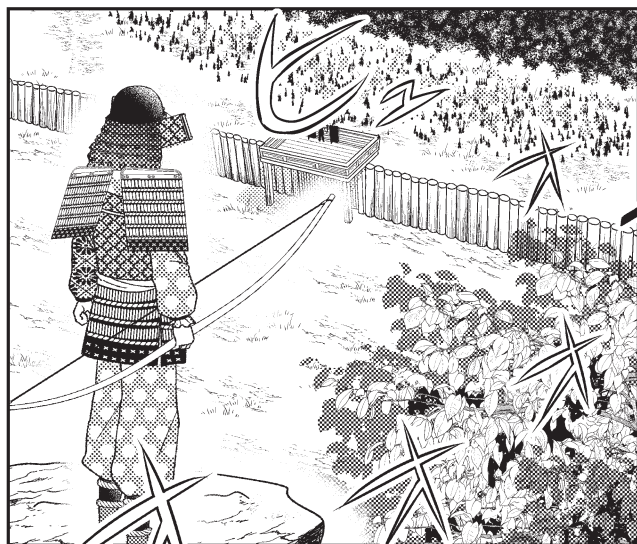
これより
修羅に入る!!!

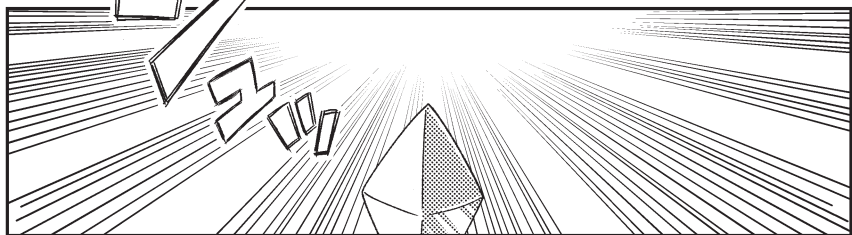
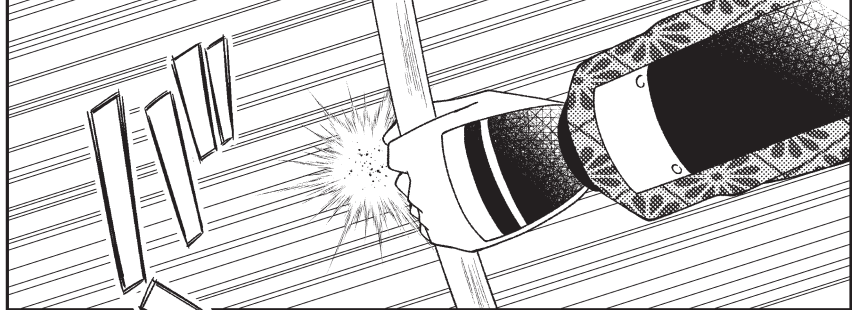
出たぞ!! あやつじゃ!!
あやつを倒すのじゃ!!













捕らえる!!!

清親がやつを射抜いたぞ!!

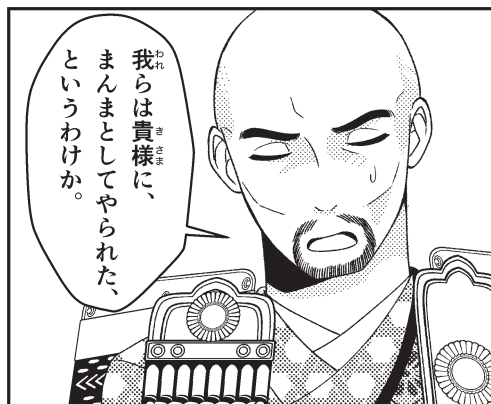
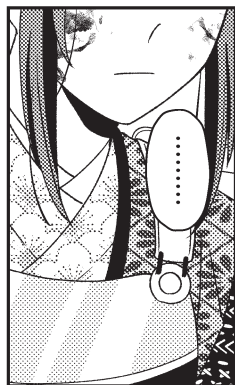
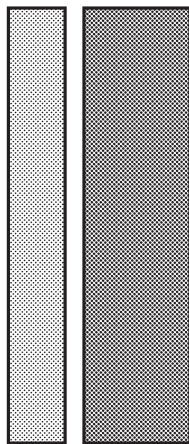
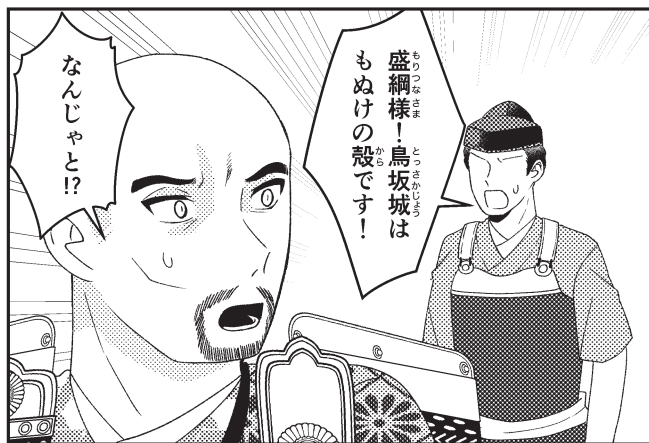


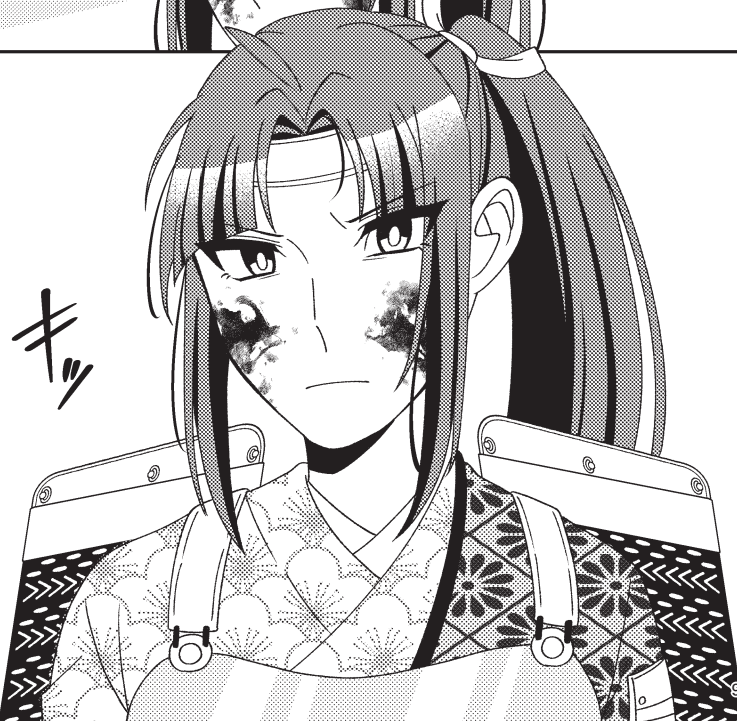
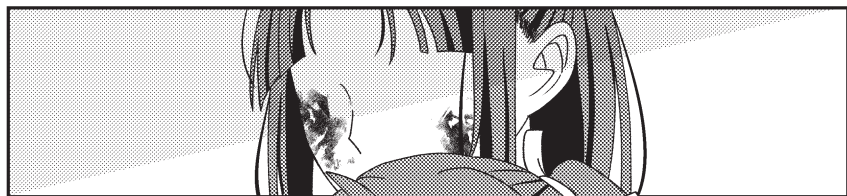
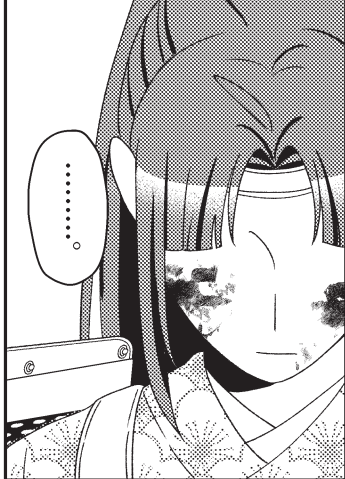
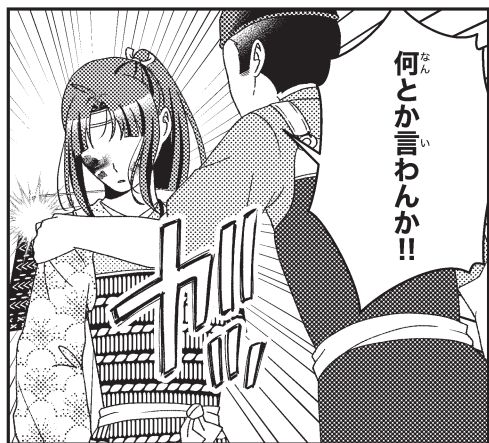
こうして、平氏が咲かせた
最期の大輪「板額御前」は、

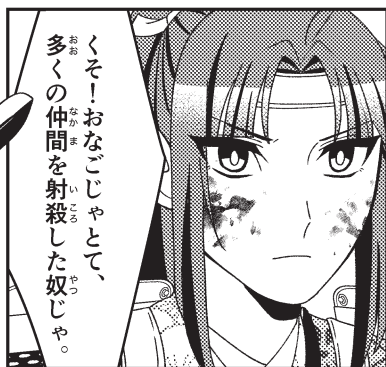
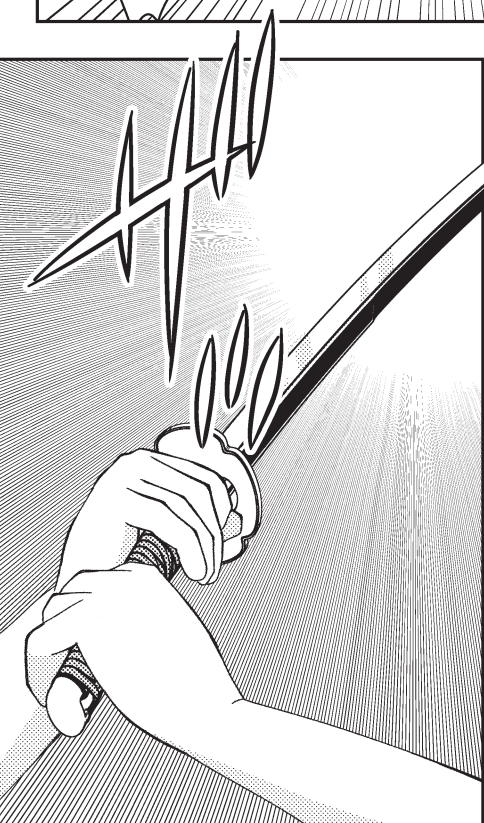
あえなくその華を
散らせたのであった。

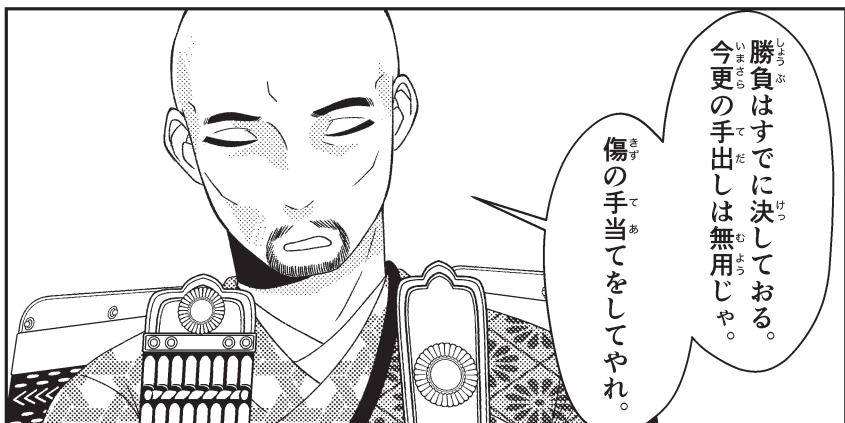
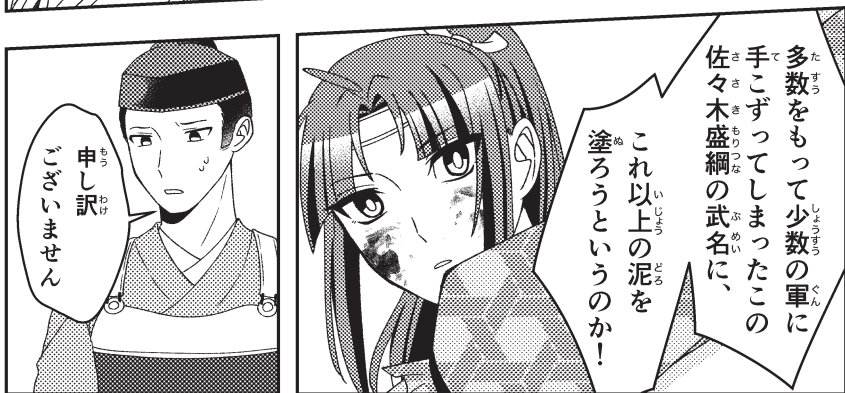
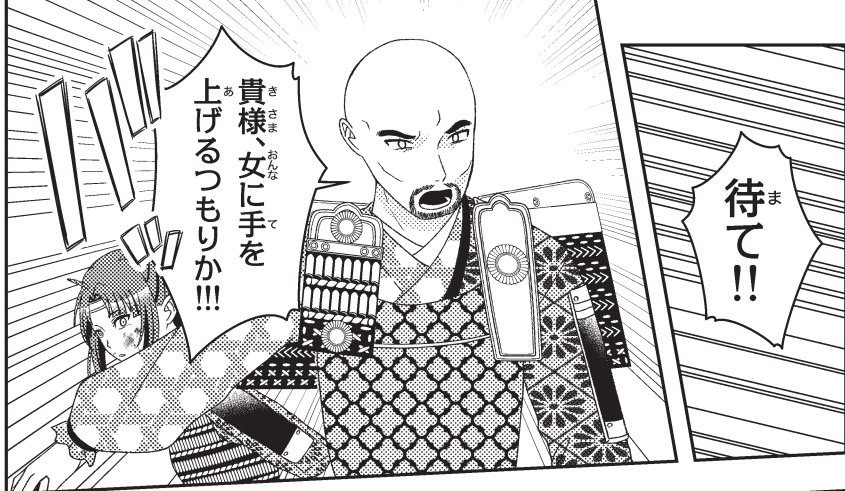
板額は、藤沢清親が
放った矢に腿を射抜かれ、

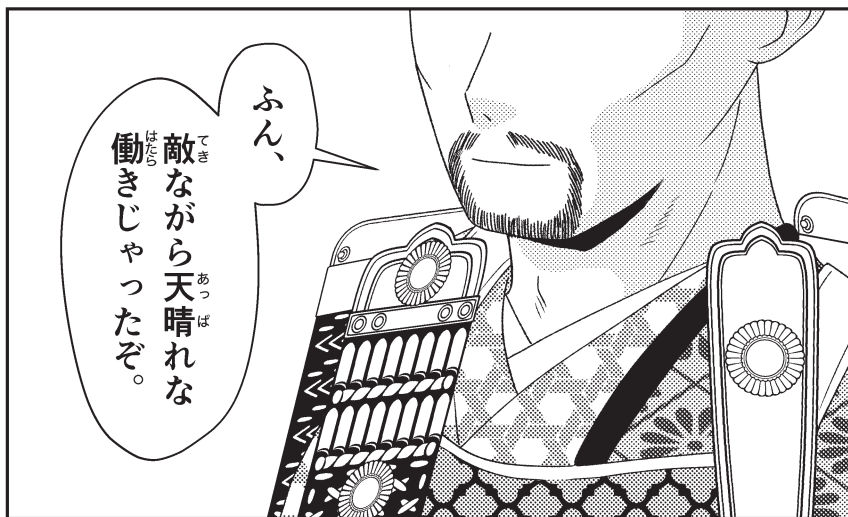
捕らえられた。











捕らえられた
板額の噂は、

鎌倉幕府の二代将軍、
源頼家の聞き及ぶ所
になった。

『かくも勇猛な女武者が、
本当におもてるというのであれば、
是が非でも見てみたい』

という將軍たつての
要望により、

板額は鎌倉御所に
引き出されることとなった。

鎌倉の御所周辺は、
件の板額御前とやらを
一目見ようという人々が
群れ集まって、

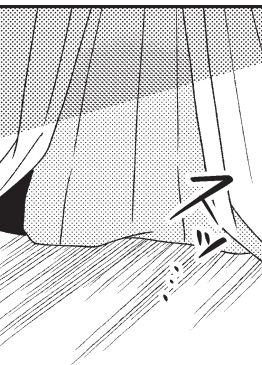
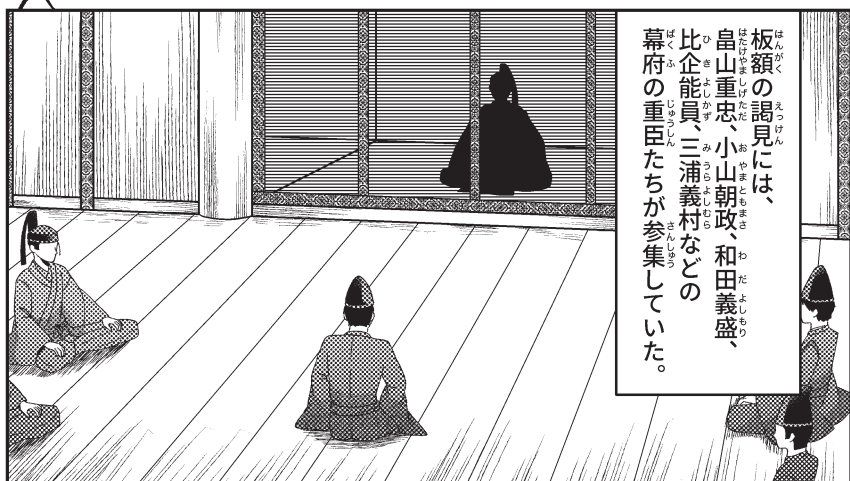
さながら市が開かれて
いるかのように
ひしめきあっていた。

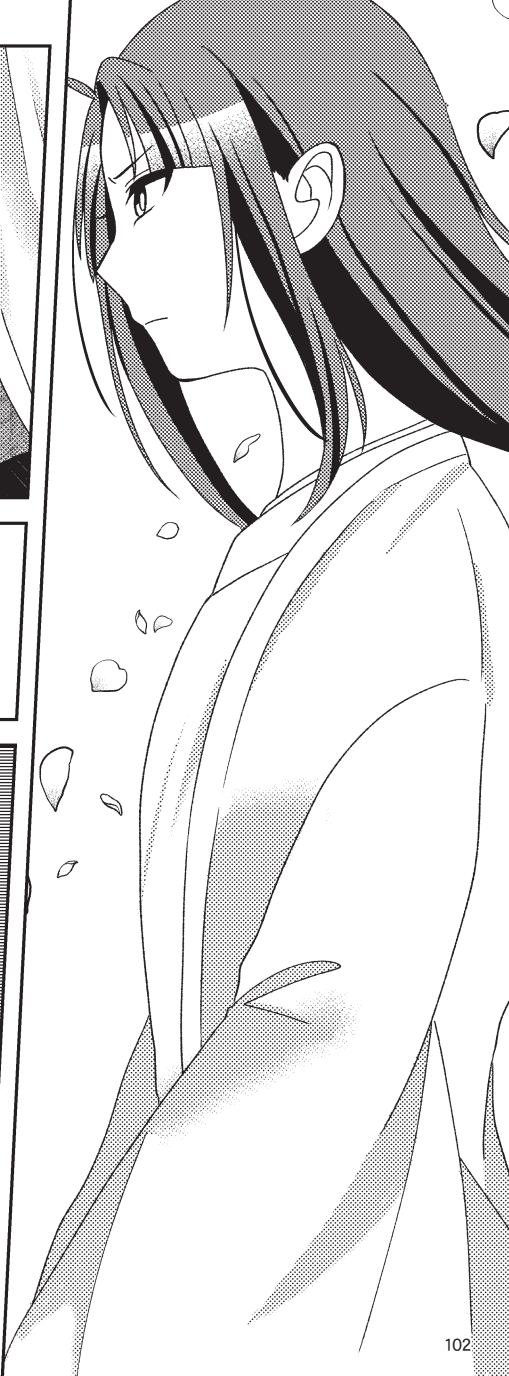
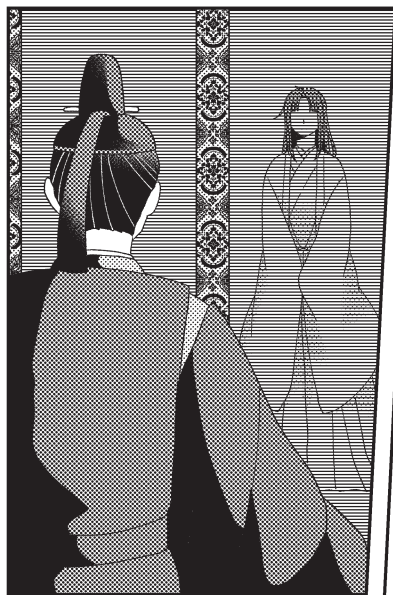
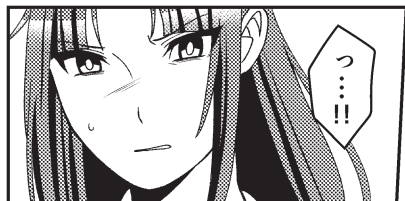
『板額という女は
鎌倉の軍勢を
何十人も弓で
射殺したそうだ。』

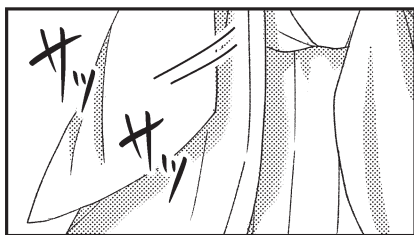
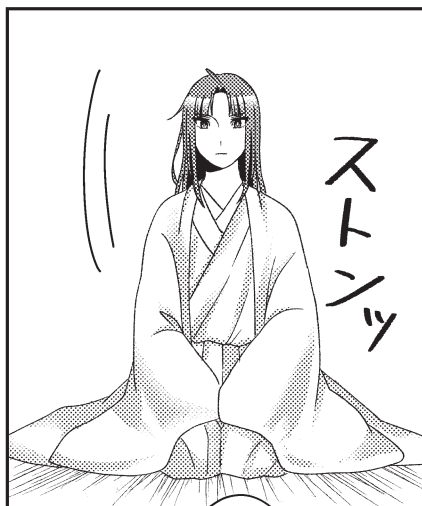
『さぞかし化け物の
ような醜い女なので
あろう。』

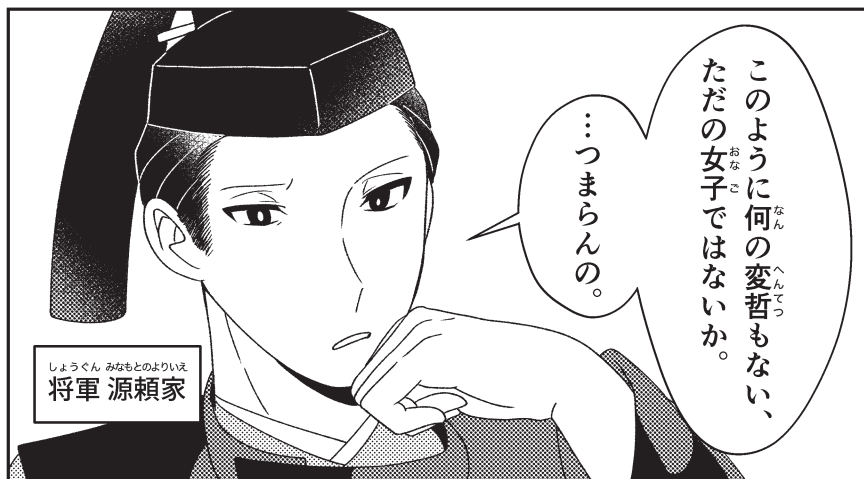
などと板額を
揶揄する言葉が
飛び交っていた。

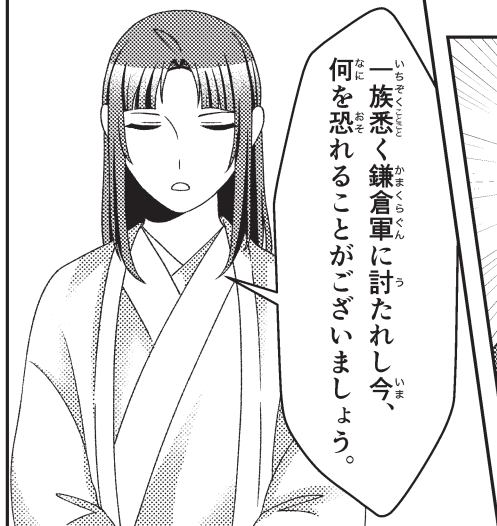
しかし、それらの囁きは、
実際に板額を目にした途端、
ピタリと止んだ。











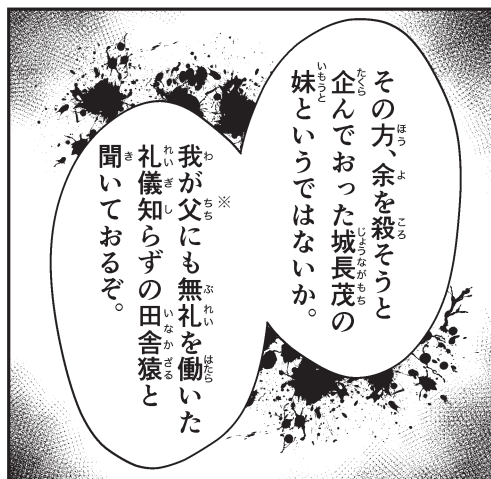
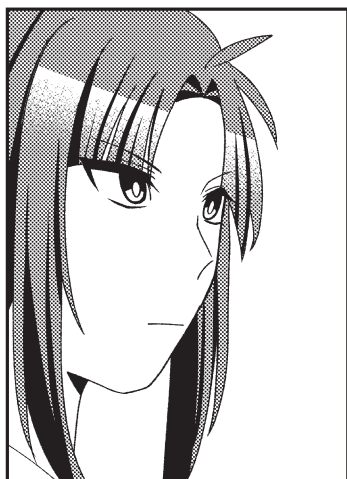
一族悉く鎌倉軍に討たれし今、
何を恐れることがございましょう。



將軍様の御前であるぞ!!
命が惜しくば控えよ!!



ふん。



その方々を殺そうと
企んでおった城長茂の
妹というではないか。

※
我が父にも無礼を働いた
礼儀知らずの田舎猿と
聞いておるぞ。



あやつのように
なりたくないだろう？

こわだかむほんさけ
声高に謀反を叫んで、
あば
さんさん暴れまわったあげく、
捕らえられて首を切られた！



おじや
：いかように仰ろうとも、
わたくしあにうえ
私は兄上を誇りに思っ
て
います。

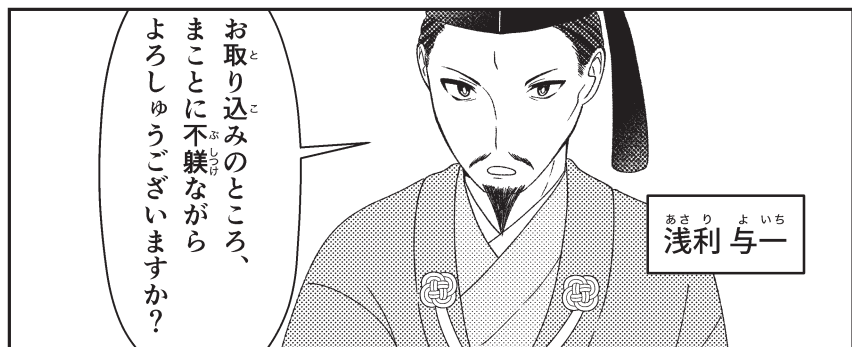
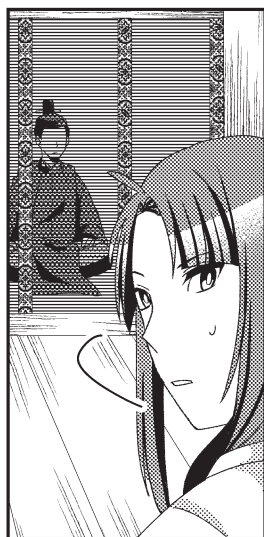
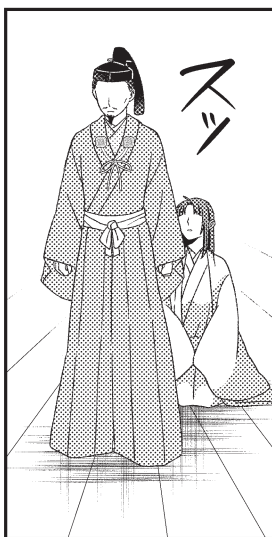
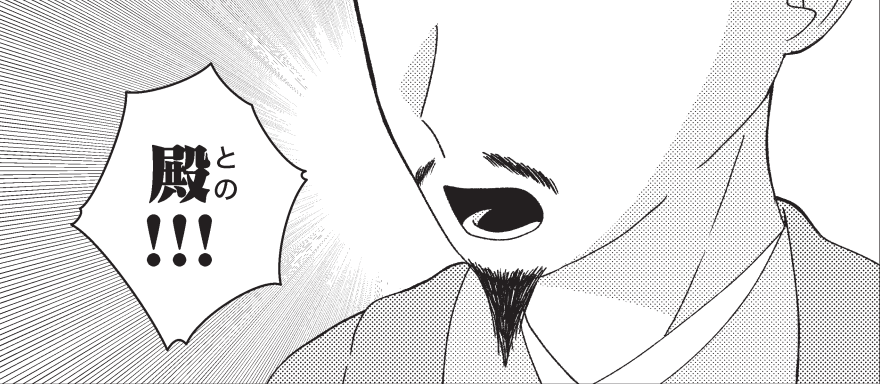


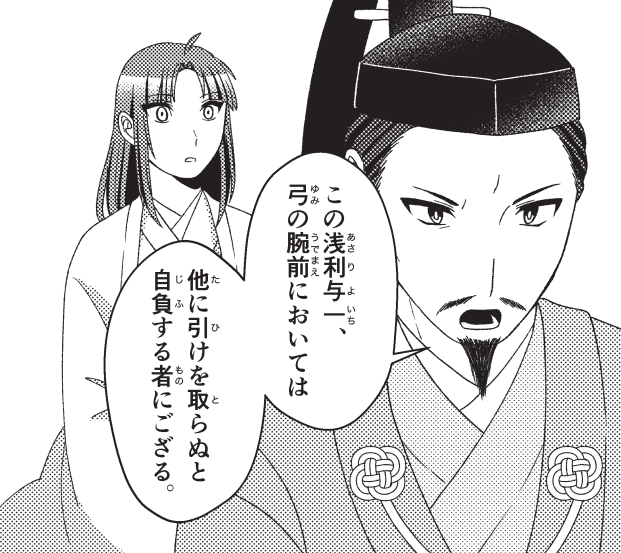
むほんにん
謀反人には島流しなど
なま
生ぬるい。

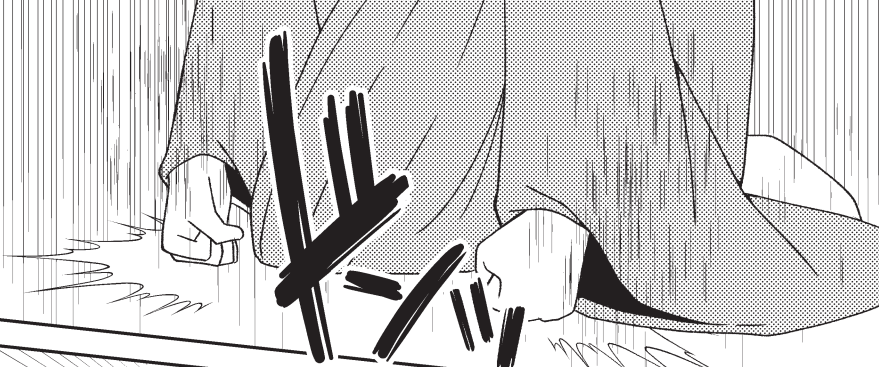
し
死が望みとあらば
いま
今すぐその首、
は
刎ねてやっても
よいのだぞ。

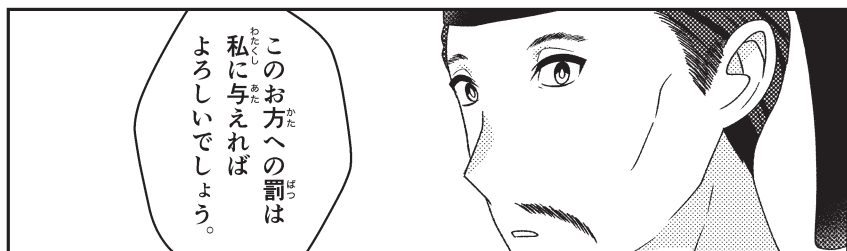
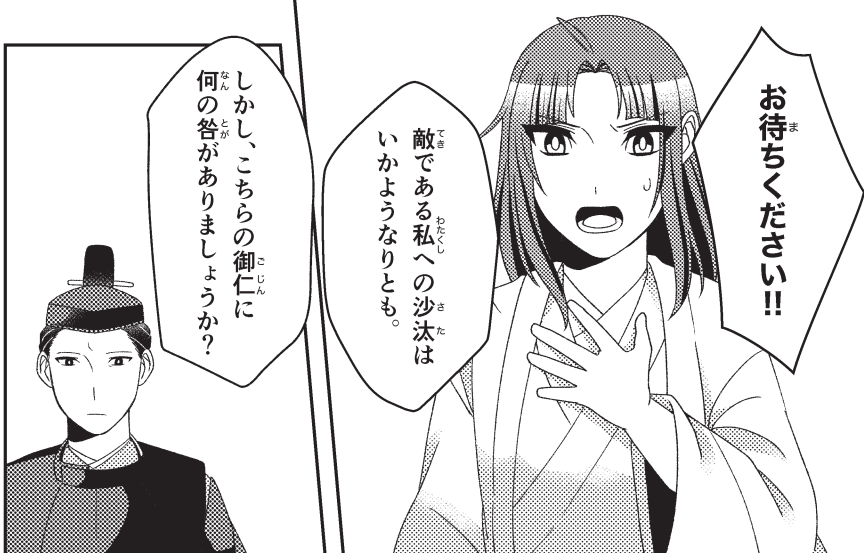


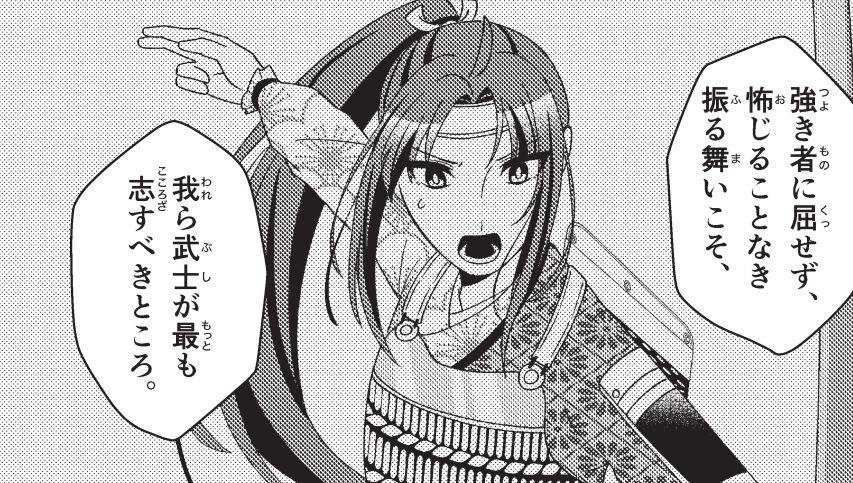
よ
余が若き將軍じやからと
あな
侮っておるのか？











強き者に屈せず、
怖じることなき
振る舞いこそ、

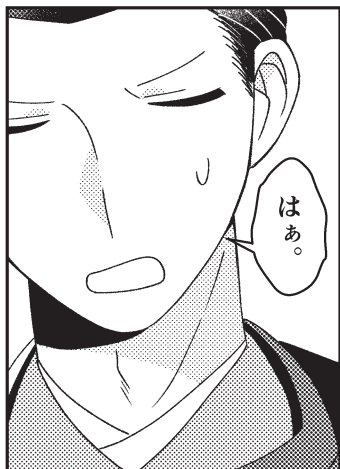
我ら武士が最も
志すべきところ。



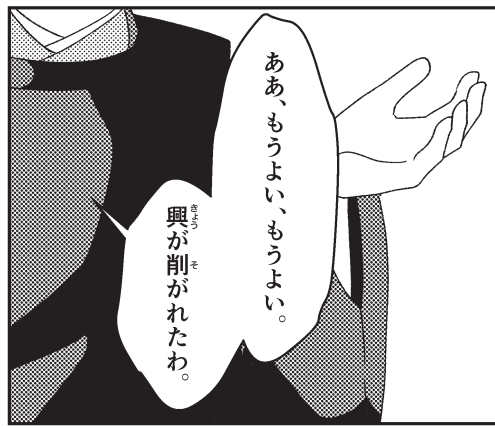
武士による政の頂点に
立たれるお方であれば、



最も承知いただけるかと
存じます。



はあ。

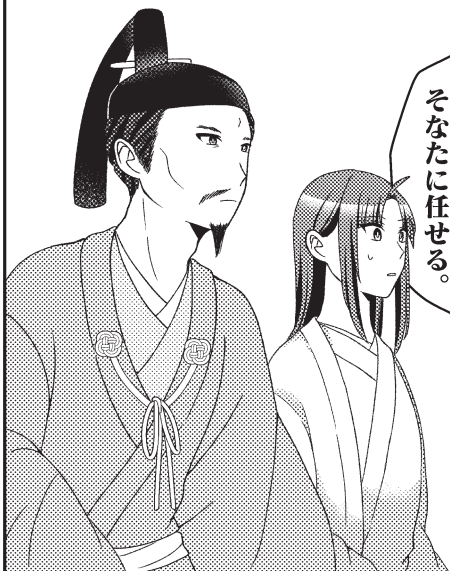


ああ、もうよい、もうよい。

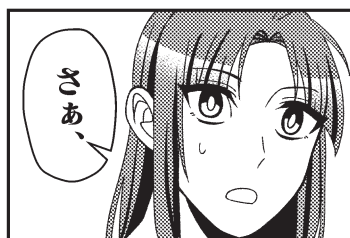
興が削がれたわ。

この女^{おんな}の身柄^{みがら}は
そなた^{まが}に任^{まか}せる。

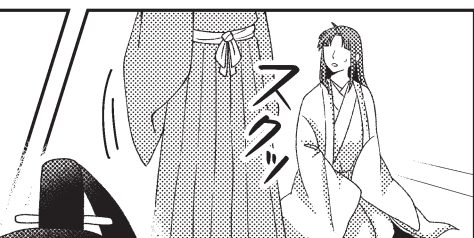
將軍様^{しょうぐんさま}のお達し^{たちし}、
ありがたく承^{うけたまわ}り申^{もう}す。



さあ、

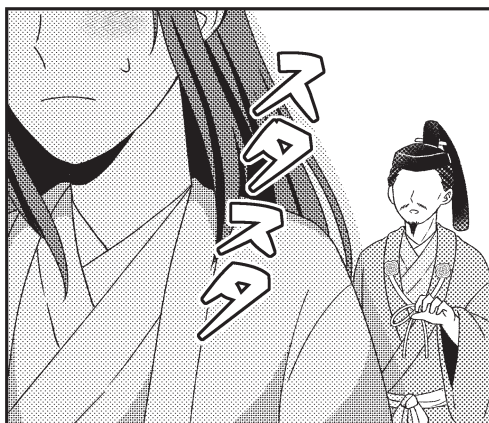
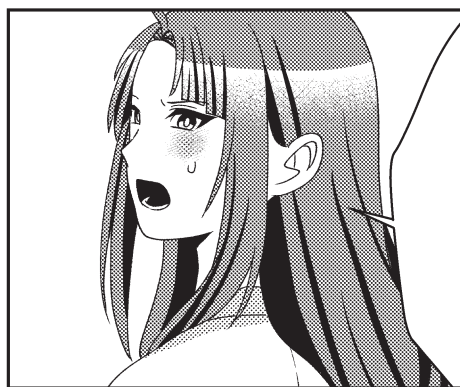
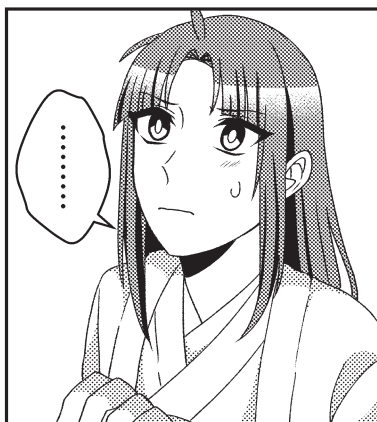
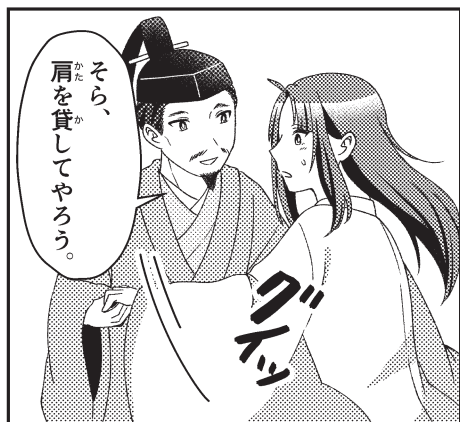


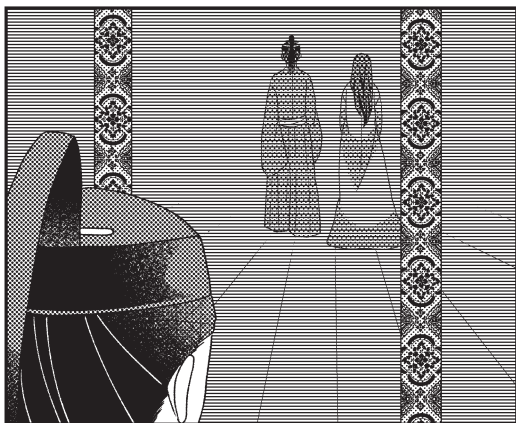
スグッ



板額^{はんがく}









こうして板額は、
奇しくも弓の名手として
名高い浅利与一の国、

甲斐へ向かうこと
になった。



もともと、類い希なる
一個の武人が、無為に
命を散らすのを惜しいと
思うただけであった。

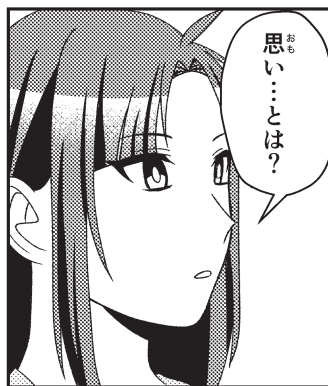
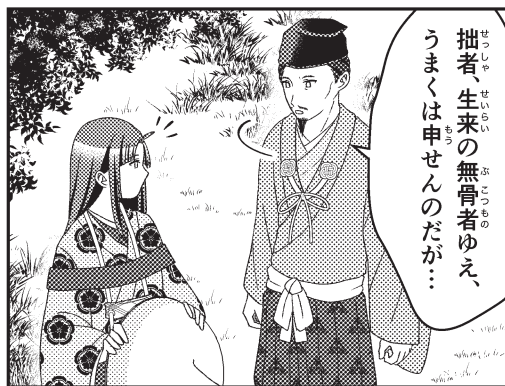


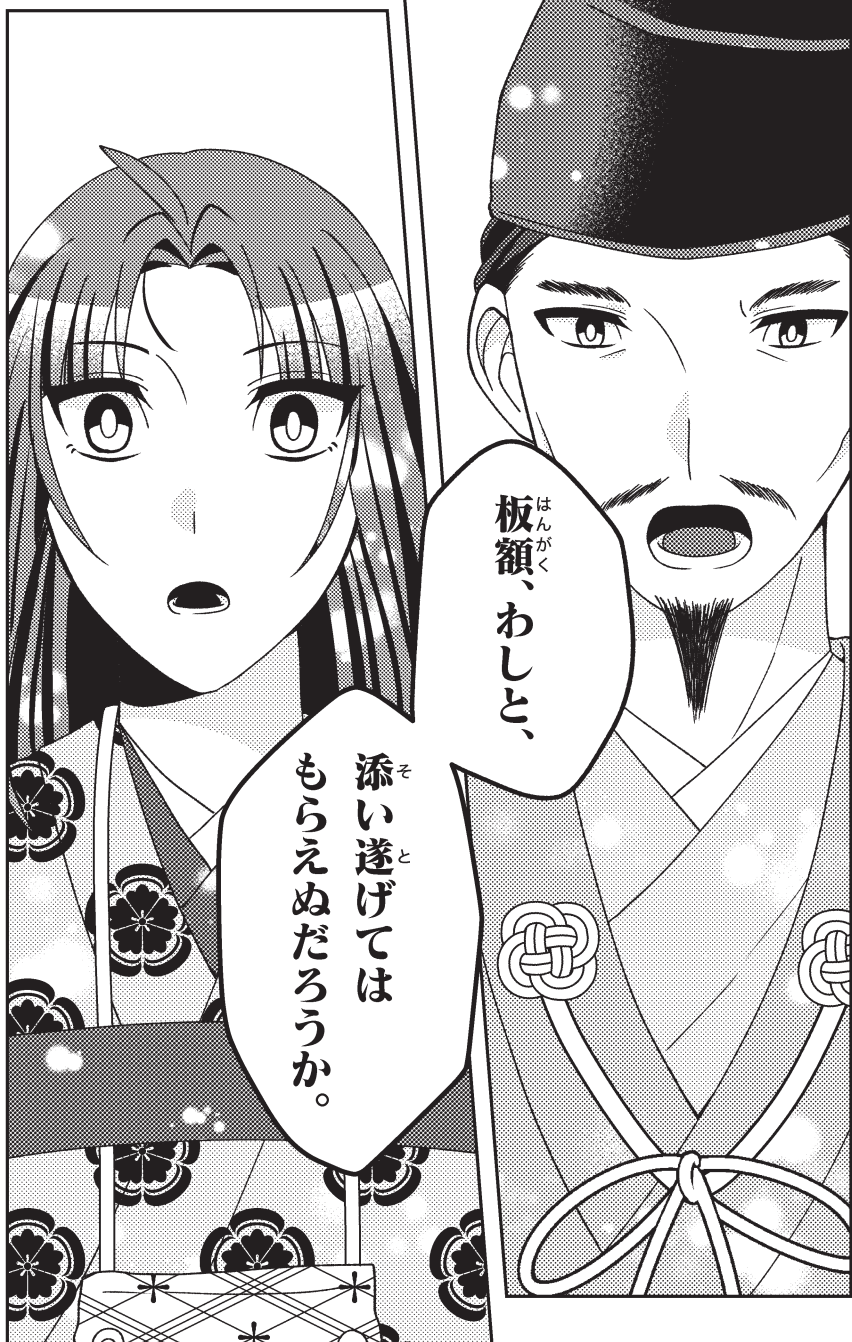
命を永らえさせた後は、
郷里に戻すなり、そなたの
好きにさせようと思って
いたのだ。



いかがとは…？

板額、そなたはこれから、
いかがなされるおつもりか。





はんがく
板額、わしと、

そ
添い遂げては
もらえぬだろうか。

…將軍に申し立てをした
よいちどのすがた
与一殿の姿…

なんと真っ直ぐな
お方であろうと思いました。

まるで在りし日の
あにうたち
兄上達を見るように
ございました。

一度は死を覚悟し、
私の思いなど
とうに潰えたものと
思っておりますが、

まさか、
このような
巡り合わせが
あらうとは…

それは…つまり…？

ワスッ

与一殿
よいちどの

お気持ち、ありがたく
ちようたい
頂戴いたします。

おお！
共に来てくれるか！

はい。

与一殿が
おっしゃられたように、
子を授かった暁には、

共にその子を弓の名手に
育て上げましょう。

そして、
与一殿の所領を、
平和に治めて
まいりましょう。



うむ、そうじゃな。
我が領内はもちろんのこと、



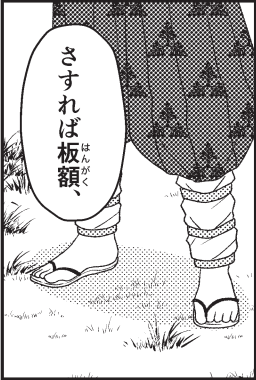
そなたのふるさと、
奥山荘の行く末も、

ワシは見守つてゆく
つもりじゃ。



そなたのように美しく、
実り豊かな奥山荘へ、
いつか二人で参ろうではないか。

与一殿、
嬉しゅうございます。



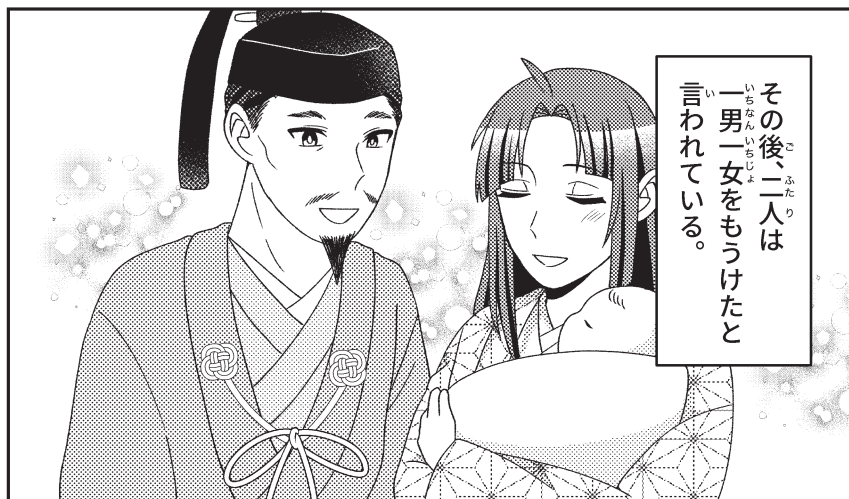
さすれば板額、



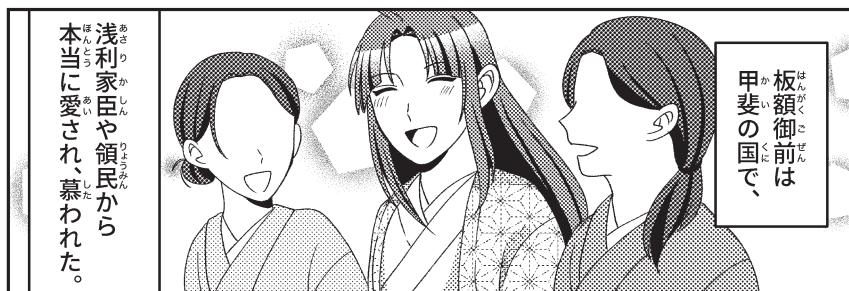
まずは我らの
国へ参ろう。



いざ、甲斐へ
出立じゃ。

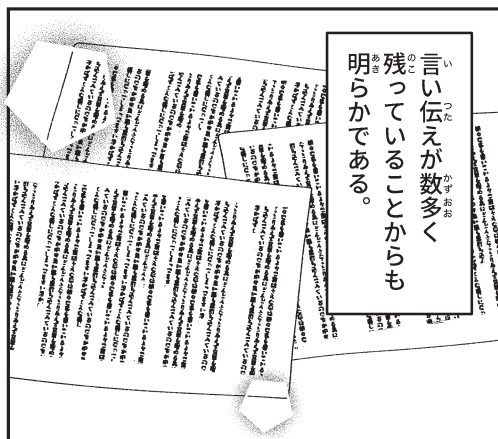


その後、二人は
一男一女をもうけたと
言われている。



浅利家臣や領民から
本当に愛され慕われた。

板額御前は
甲斐の国で、



言い伝えが数多く
残っていることから
明らかである。



それは、甲斐の国に
板額由来の地名や、



こうして板額御前は、
静御前、巴御前とともに

現在でも鎌倉時代を
代表する女性三大御前の
一人として、

歴史にその名を
列ねているのである。



資料編

板額御前の伝説
板額御前美術館

今に語り継がれる

は ん が く ご ぜ ん

で ん せ つ

板 額 御 前 の 伝 説



樽が橋付近にある大岩（新潟県胎内市）

●板額御前の大岩落とし
鳥坂城での戦いとき、板額御前は百発百中の強弓で敵方を射倒しただけでなく、鉄の足駄で大きな岩を蹴り落として大奮闘したという伝説があります。今も鳥坂山の附近一帯に累々と転がっている大岩がその名残だという説や、麓にある開拓地「仁谷野（にいだの）」を開墾するために積んでいた田んぼの大石が「板額御前が投げ落としたものだ」という説もあります。鳥坂山はもともと崩れやすい地質であり、崩れて転がってきた大岩を見て、後世の人が板額御前の勇ましさと結びつけたのかもしれません。



現在の「樽が橋」（新潟県胎内市）

●城主・資盛を逃がした「樽が橋」

佐々木盛綱が率いる鎌倉の軍勢との戦いに敗れた城小太郎資盛は、胎内川のほとりに生えていた老松を倒し（一説には板額御前が倒したともいわれる）、これを渡り、再挙を図るべく出羽の国に走りしました。この老松の橋が、小太郎が渡った橋、小太郎が橋、太郎が橋、転じて「樽が橋」になったと伝わります。城氏はもともと平氏の流れを汲む一族ですが、先祖が「秋田城介」という役職に就いたことから「城」という姓を名乗るようになりました。また、城資国の妻で城資永たちの母となった女性は出羽の豪族「清原氏」の出身であり、城氏と出羽は深い関係がありました。資盛は一旦出羽に逃げて支援を要請し、城氏を再興しようと考えたのかもしれませんが。

●板額御前由緒の松

胎内観音のお堂の前に植えられている松。前述の「樽が橋」伝説や板額御前の名を後世に伝えるため、地域の人が大切にしています。残念ながら「板額御前お手植え」ではありません。

●鳥坂城にまつわる伝説

・城が水攻めにあい水不足に悩んだ際、その苦しみを敵に悟られまいと、白米で馬を洗い、水に見せかけた。

・領主が入浴中、夕立が降ってきたので、板額御前が領主ともども風呂桶を担いで屋内に入れた。

・城氏軍が鎌倉勢に敗北して逃げ落ちるとき、いつか城氏が復興するときの資金として、鳥坂城（白鳥山）に「金の鶏」を埋めて逃げたという。



由緒の松（新潟県胎内市）

●城氏が眠っている？
「城の山古墳」

地元住民は「偉い領主様のお墓」として古くから大切に管理し祀ってきましたが、いつしか誰のお墓なのかは忘れられてしまい、偉い領主＝城氏のお墓とみなされ、「城の山古墳」と呼ばれるようになりました。

最近の発掘調査で棺の中から発見された骨のDNA鑑定により、古墳に眠っている領主は、北陸系の一族と思われる若い男性であることが判明しました。



城の山古墳（新潟県胎内市）



帯石（山梨県笛吹市）

●帯石

鎌倉の御家人、浅利与一（義成（義遠とも））に見初められ、妻となった板額御前は、やがて子どもを授かります。昔の女性は、大きくなったおなかを支えるため、着物の上から「腹帯（はらおび）」を結っていました。板額御前も腹帯を結めて安産祈願のお参りに出かけましたが、歩いているうちに帯が緩んできてしまいました。そこで、途中で腰かけて帯を締め直したのが「帯石」です。

今も、帯石に座ると安産のご利益があると言われ、多くの女性がお参りに訪れています。

●藤堡の滝と瀬立不動

板額御前が安産祈願のお参りをしたのが、藤堡の滝（ふじめたのたき）の脇にある瀬立不動（せたてふどう）です。

藤堡の滝は、真夏でも冷たい清らかな水が流れています。また、春一番に咲く水芭蕉の名所にもなっています。この水芭蕉は、胎内市（当時の中条町）と笛吹市（当時の境川村）が姉妹都市締結をした記念として中条町から寄贈されたもので、当初七〇〇株だった水芭蕉は現在三〇〇〇株にまで増えています。



藤堡の滝と瀬立不動（山梨県笛吹市）

●板額塚

一説によると、浅利与一と板額御前には子どもが二人生まれ、男の子「浅利太郎知義」は浅利家を治めていき、女の子「きく姫」は武田氏の流れを汲む石橋信繼に嫁ぎました。晩年の板額御前は、きく姫の嫁ぎ先である石橋家の「八郎館」のそばに移り住んでいます。

笛吹市境川町にある「板額塚」は、板額御前のお墓ではないかとも言われており、市民が弓矢やお守り、花などをお供えして、今も大切にしています。



板額塚（山梨県笛吹市）

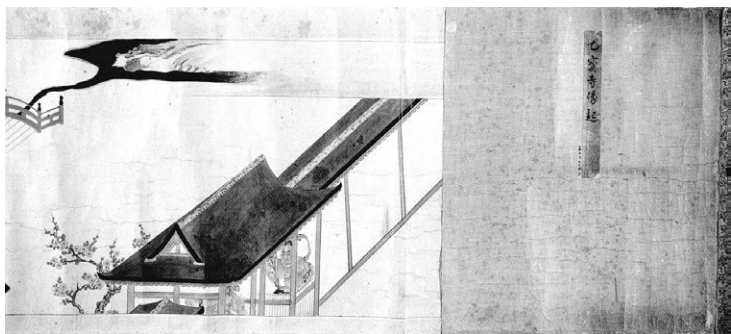
●板額が使用した弓、なぎなた、鎧通（短刀）



神社に伝わる武具（山梨県笛吹市）

笛吹市春日居町にある賀茂春日神社の神主をしている奥山家には、板額御前が使用し、奉納したと言われる弓、なぎなた、鎧通（よろいどおし／反りのない、重厚にきたえた短刀）が残っています。奥山家は城氏の流れを汲む一族です。奥山家が近くにいることで、板額御前も何かと頼りにし、心強く思ったことでしょう。

城氏と乙宝寺

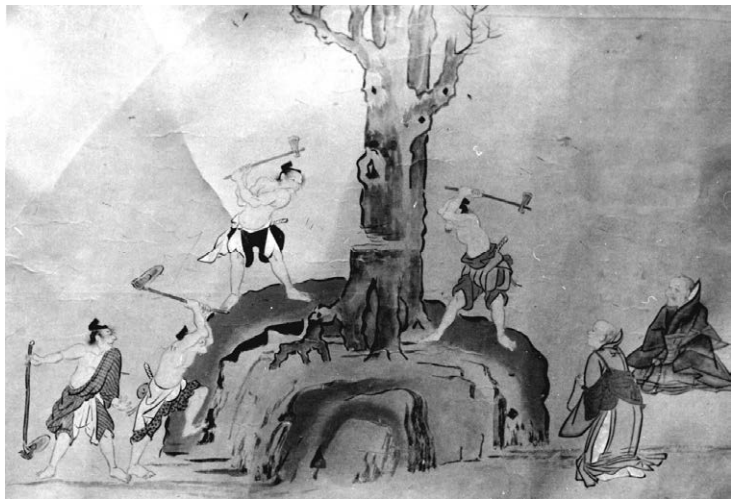


- ① 胎内市にある乙宝寺は創建天平8（西暦736）年。お釈迦様の右目が納められたお寺を「甲寺」（中国にあります）といい、左目が納められた乙宝寺は「乙寺（きのとでら）」と呼ばれました。

お寺の歴史を書き表したこの縁起絵巻は、江戸時代に活躍した画家「谷文晁」が弟子10人と描いた作品で、米沢藩主の上杉鷹山が乙宝寺に寄進しました。絵巻には、城氏にも関係する不思議なお話が描かれています。



- ② 今から800年以上昔の平安時代末期。乙寺は宮禪師（みやのぜんじ）という僧侶が住職をしていました。宮禪師は城資永や長茂の伯父にあたります。あるとき宮禪師が住む部屋のそばにある一本の古木の根元から不思議な光が出て、七色の旗が空中に現れ、七日七夜にわたり舞い踊りました。



- ③ さらに、ある夜、宮禅師の夢の中に一人のお坊さんが現れ、「木の下にお釈迦様の遺骨（仏舍利／ぶっしやり）があります。早く掘り出してください。」と告げました。

そこで、数百人の村人を集めて、その大木の根元を掘ったところ、大きな石（塔心礎）が埋まっているのを発見しました。



- ④ 石のくぼみの中央にある穴を調べたところ、その中からお釈迦様の遺骨、仏舍利が現れました。



- ⑤ 宮禪師は、掘り出した仏舎利を、京都御所の後白河上皇のもとに持っていきましました。後白河上皇は仏舎利を都に安置しようとしたましたが、仏舎利は空中を飛んで、もとの乙寺の石（塔心礎）のところに帰っていきましました。後白河上皇は仏舎利を納める金塔をくださり、お寺の名前も「乙寺」から「乙宝寺」に改名されましました。



- ⑥ 宮禪師は仏舎利を金塔に納め、花を供え、香をたき、毎日毎日、朝晩拝んで大切にしましました。
現在、仏舎利は、乙宝寺の大日堂の宝物殿に大切に安置されています。また、仏舎利が埋められていた石（塔心礎）は、同じく乙宝寺の六角堂に保存されています。六角堂は「結びの堂」とも呼ばれ、縁結びのご利益があるといいます。

板額御前 美術館



月岡芳年「芳年武者无類 阪額女」

江戸時代の歌舞伎・浮世絵など多くの作品で板額御前は男勝りで怪力の醜い女性として描写されました。歌舞伎などのお話を面白くする為のキャラ作りだったようです。



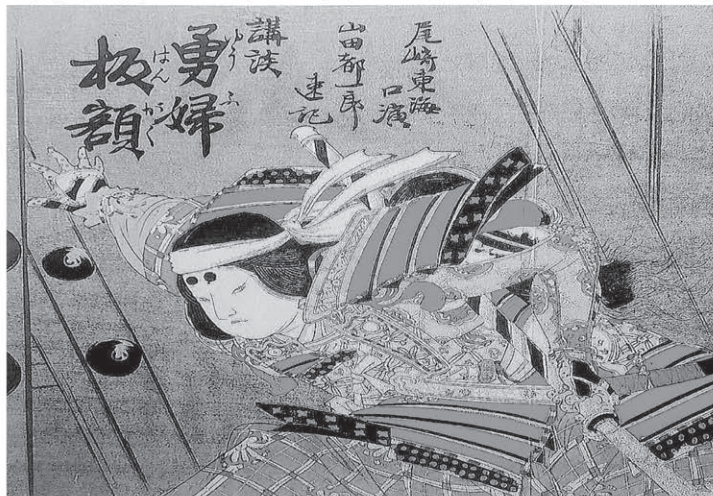
上下とも歌舞伎「和田合戦女舞鶴」の板額御前を描いた作品です。

怪力で敵の城門をぶち抜く板額御前の姿が描かれています。





↓ 作者年代共不明 ↑ 歌川広信「華競錦写絵 半がく女」





歌川芳虎「武者鑑」 板額御前とその夫である浅利与一義遠と一緒に紹介されています。

後ろの文章には鳥坂城の戦いから与一が板額を娶る物語が書かれています。



—
板額問答集
—

板額問答集

～少し詳しい解説～

問一 板額の家系は？

【回答】

14～15ページの系図のとおり、桓武天皇からでた平氏の一流で、兵（つわもの）の系譜に連なる軍事貴族の末裔になります。新潟（越後）には、十一世紀後半頃に進出して、実力を蓄えていきます。大きくみれば、坂東平氏や清盛等の都の平氏も同族ということになります。

板額の兄城資永（じょうすけなが）は、奥羽の後三年合戦（一〇八七）で敗れた清

原武衡（きよはらたけひら）の血を引いているといわれており（資国に武衡の娘が嫁ぎ、資永が生まれる）、出羽国の正統な継承者としての意識があり、金色堂で有名な奥州平泉の藤原氏と競合関係にあったものと思われます。

資永は、若い頃に京都に出仕し、検非違使（けびいし）という都の治安を守る職に補任されます。平清盛（たいらのきよもり）に近づき、平泉に対抗しようとしたのかもしれません。

なお、城という名乗りは、初代の繁成（しげなり）が秋田城介（あきたじょうのすけ）という官職をもらったことに由来します。

板額は、政治の実権が都の天皇・貴族から武士に移るようになってくる時代に、北越後において在地を治める力を持っていた城家の一員であったのです。

問二 板額の合戦時の年齢は？

【回答】

板額が歴史に出てくるのは、鎌倉幕府が編纂（へんさん）した『吾妻鏡』の建仁元年（一二〇一年）の記事のみですので、正確にはわかりません。兄とされる城資永は、一一一五年頃の生まれで、一一八一年に亡くなっています。父資永が亡くなったとき、嫡男の資盛（すけもり）は若年であったため、家督は資永弟の長茂（ながもち）が継ぎます。板額は、資盛のおばであったと書かれています。弓を引き続ける体力があり、後に子をなしていることから、資盛とあまり年の変わらないおばであったと思われます。

したがって、板額は年齢的に資永・長茂兄弟の実の妹と考えるのは難しく、資永の最後の妻の妹ではなかったかと思われます。

問三 板額という名前の由来は？

【回答】

中条に飯角（い い ず み）という集落があります。「飯角」を音読みすると「はんがく」と読めます。彼女は、飯角の生まれと思われています。

そして、『吾妻鏡』に記事を載せるにあたり、「飯角」に「板額」という漢字を充てたため、後世にいいずみ御前は、はんがく御前と呼ばれるようになったと思われます。当時の人々は、音が通じれば、異なる漢字を用いることが多々あり、例えば資永も助永、長茂も長持と記されることがあります。板額も『吾妻鏡』では「坂額」、後には「阪額」という字も充てられています。

問四 板額は、なぜ弓を引けたの？ 弓の腕前は？

【回答】

板額は女性ながら、資盛ら武家の男子に混じって弓馬の鍛錬を続けてきたと思われます。

鳥坂合戦にあたり、鎌倉勢に弓で応戦し、腕前は「百発百中」で、中（あ）たったもので死ななかったものはいなかったと『吾妻鏡』に記されています。

問五 板額は、なぜ戦わなくてはならなかった？

【回答】

資盛の叔父の長茂が、京都で鎌倉追討を目指して武装蜂起しましたが、鎌倉方に討ち取られました。それに合わせて、資盛を大将とする本国の越後の城一族も立ち上がりました。板額は、一族を守るために戦わざるをえなかったのです。

問六 板額は、歴史の有名人物と関わったことがある？

【回答】

板額は鳥坂の戦いで生捕りにされた後、鎌倉へ連れていかれ、二代将軍源頼家（みなもとのよりいえ、ただし任官は翌年）に対面しています。

御所では、畠山重忠（はたけやましげただ）、小山朝政（こやまともまさ）、和田義盛（わだよしもり）、比企能員（ひきよしかず）、三浦義村（みうらよしむら）といった錚々（そうそう）たる顔ぶれの有力者が並び、板額を一目見ようと御家人たちが群参したことが記されています。

翌日、板額を所望した浅利義遠（あさりよしとお、与一、義成）も、その場で板額を見初めたものと考えられます。

問七 城家の遺した財宝はありますか？

【回答】

城繁成には、生まれてすぐに神隠しにあい、狐に育てられたという伝説があります。四年後に発見された時、老人に化けた狐から刀（野狐の太刀）と櫛を授けられたとされます。この刀は、「日本国主」の象徴とされ、代々城家に伝えられてきましたが、鳥坂合戦の際に失われたとされています。

なお、発掘調査によって、本郷町くあかね町く西本町の政所条遺跡群（下町・坊城遺跡、坊城館跡、江上館跡）と羽黒の鳥坂城跡から城家の時代の遺跡・遺物がみつかっています。

詳しくは、あかね町にある「奥山荘歴史館」や市の図書館で色々と調べるとよいでしょう。

（水澤幸一）



本書は、公益財団法人 B & G 財団の「ふるさとゆかりの偉人マンガの製作と活用事業」の助成を受けて製作・発行いたしました。

マンガふるさとの偉人 板額御前物語

発行日	令和5年(2023年)3月発行
編集・監修	胎内市教育委員会(生涯学習課 文化・文化財係) 胎内市偉人漫画製作活用検討委員会 (委員) 池田 裕之 市村 新五 伊藤 純 水澤 幸一 渡辺 悟 渡辺 優紀 (五十音順、敬称略) (事務局) 胎内市教育委員会教育長 中澤 毅 課長 佐久間 伸一 係長 伊東 崇 平山 順子
協力	板額会
発行	胎内市教育委員会 〒959-2807 新潟県胎内市黒川1410 TEL:0254-47-3409 (生涯学習課 文化・文化財係)
マンガ製作	島津印刷株式会社(中川 佳南 田宮 佑子 高橋 渚) 板額会
印刷製本	島津印刷株式会社

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上、認められておりません。